

ごめんください、足尾のこと教えてください！――地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊^[1]が行った、生活史の聞き取りの内容を抜粋して掲載しています。「聞き取り」と表現していますが、最初は「足尾について教えてもらいませんか?」という立ち話から始まり、お年寄りの集まりや日常的なお茶飲み話など様々な場面で、地域の方にお話を伺つたものです^[2]。私たちの聞き取りでは、話し手の方にとつての出来事の見え方や気持ちを大切にしています。そのため、中には曖昧な部分や歴史的事実と異なるもの、適切ではない表現などが含まれることもあるかもしれません。けれども、過去がそのように記憶され、今このように語られるということも貴重な足尾における生活史の一側面だと考えています。話の信憑性について、疑問を持たれる方もいらっしゃるかと思いますが、「こういう生き方や想いもあつたんだな」ということで読んでいただけたらと思います。

冊子を読んでみて「自分の経験や見方とは違うので、言いたいことがある」「意見や記憶を伝えたい」という方は、地域おこし協力隊までお知らせいただき、是非お話を伺わせて下さい。この冊子が、様々な視点に出会うきっかけとなれたら幸いです。また、冊子とは別に聞き取り全体の文字おこし資料を日光市役所足尾総合支所で保管しています。

最後になりますが、貴重なお話を聞かせていただき資料化にご協力くださった皆さま、いつも私たちの活動をご支援してくださる皆さまに深く感謝申し上げます。

1 総務省の取り組みで、人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行っています。日光市足尾地域では平成23年度から導入。

2 この冊子での基本的な聞き手は、地域おこし協力隊の志村春海（以下、S）、中山京（以下、N）。また、口述史の観点から、日本大学文理学部社会学科教授の好井裕明さん（以下、Y）にご協力いただきました。

- 02 この冊子を手にしてくださった方へ
04 凡例
- 05 | Q1 | チヨリチヨリって、どういう意味ですか？
06 渡良瀬川と鮎 [2014年1月10日]
07 ハゲ山のウド [2014年2月10日]
10 煙に慣れる [2014年5月19日]
11 公害の足尾といいイメージ [2014年8月20日]
- 16 足尾小話「お客さんからのお土産」
- 17 | Q2 | 坑内ってどんな場所なのですか？
18 坑夫のお父さんの仕事 [2013年7月11日]
20 カンテラの光 [2014年1月10日]
22 坑内の職場 [2014年9月18日]
- 28 足尾小話「坑内でユーモア」
- 29 | Q3 | 社宅の暮らしへ、どんな生活だったのですか？
30 鶴小屋にみえる [2013年11月26日]
34 夢のような近所付き合い [2014年1月10日]
38 部屋の広さ [2014年8月19日]
- 41 | Q4 | 戦時中、外国人の人とどんなやり取りがありましたか？
42 イモとコッペパンを交換 [2014年4月15日]
44 豊な恵恵を教えてもらう [2014年7月]
46 近所の人や進駐軍との交流 [2014年7月7日]
- 51 | Q5 | キラキラした石、見つけたのですが……
52 鉱石のようなお菓子 [2013年7月11日]
53 喫飯所で鉱石を洗う [2014年3月5日]
- 58 坑内のしくみ
- 60 おわりに
61 地図
62 年表
63 用語集
64 クレジット

〔凡例〕

- ・話し手の方は、次の通りに掲載しています。
 - 1 …夫婦の場合は、夫、妻。兄弟の場合は、兄、弟。
 - 2 …男性はM、女性はF。複数の場合はMa、Mbと表記。
 - 3 …市職員は、Pa、Pbと表記。
 - ・沈黙は、……。○○……。○○。……○○。
 - ・省略は、……。(省略)……。
 - ・話の途中で途切れている時は、「」で次の会話を続いています。
 - ・笑い声はカタカナ表記。もしくは笑です。
 - ・語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表しています。
 - ・冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
 - ・その他の鉱山用語、地名や補足には注を入れ、
典拠があるもの以外は協力隊が編集しています。
 - ・()の使い方は2種類あります。
 - 1 …インタビューの場の状況や状態を表しているもの。
 - 2 …文脈を理解しやすくするために編者が補ったもの。
- 〔聞き取り抜粋の編集方法について〕
- ・聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
 - ・聞き取り抜粋箇所の後に、協力隊2名のコメントを掲載しています。
 - ・話し中に出てくる地名や言葉については、
61頁「地図」、63頁「用語集」をご覧下さい。

—Q 1—

チョリチョリって、どういう意味ですか？



岳 有越沢（伊東信撮影）

高齢者の集まりで押し花を作る場面でのこと。会場付近で昔は植物が見当たらなかつたので、遠く（豊潤洞「1」）まで花を摘みに行つていたという話になつた。その中で、「煙で植物がみんなチヨリチヨリになつた」と皆さんが口々に言つていた。この「チヨリチヨリ」、私たちにはあまり馴染みのない言い方なので意味を尋ねると、製鍊からの煙で植物がチヨリチヨリ（枯れたような、しなつてしまふような感じ）になつてしまふという意味だと知つた。當時チヨリチヨリにならないよう煙が来たら植物に新聞紙を被せて守つたという話は、このような会話だけではなく、新聞記事でも確認できる「2」。「公害の町」というイメージが先行し、実際の生活ではどのような風景があつたのか知らなかつた。少し聞きづらいとも感じていた公害の話題だが、実際の生活の中に馴染みのある場面として、ふと登場する。

渡良瀬川と鮎

〔2014年1月10日〕夫・妻・志村・中山

偶然お会いした方に、仕事から生活風景、人間関係や当時のお気持ちなどの話を聞かせていただいている。初めてお話を伺つた時は、台風時、銅山の施設が浸水し、水処理をする専門の方が苦労されたとのこと。そこから公害の話題になる。昭和30年代の話。

夫——それで、鉱毒問題が出ると駄目なんだよな。インチキもある。銅山も大変だつう。……だから魚なんか今、渡良瀬川の

下流あたりで、鮎釣りやつているでしょ。あれだつて始めはそこの人らがずるくてさ。鮎を渡良瀬川に放して、「死んだら鉱毒のせいだ」って言つて賠償とする気になつて、始めはそれでやつたんだよ。鮎放して死んだらそれ調べて、「これは鉱毒、鉱毒で死んだ」つて。そうしたら、鉱毒が入つてないで、いたずらとかあいいうので死んだって。だから一匹死ぬと大変だつた。持つてきて調べて、「鉱毒だ」って言つたら直ちに「賠償するべ」つてそこの人らがわざと放したんだから。鮎を。いたずらばかりなんだもん。モリで突かれたとかそういう跡ばっかりあつて。んで、今度はそ

こあたりで鮎釣りやっているもんね。……だからもう、目の敵でいろんなのを取る氣でいたんだよ。

S — ふーん。

妻 — フフフ。

夫 — そういうあれがあるんがね。それそここのやつが言つていたもん、「まさか渡良瀬川で鮎釣りができるとは思わなかつたよな」って。頭のやつが言つたんだべ。「鮎が死んだら賠償取れっから放してみんや」って。そういうのがいたんだよ。そうしたら、「死なねえんだよな」って言つて。

一同 — ハハ

妻 — ね、

夫 — 「鮎が死んだら……」って言つたから確認してみると、「先が突かれたとか、跡があるから駄目だよ」って。知つている人はね、近くで鮎釣りができるって喜んでね。

妻 — フフ。

「お話を聞いて」

S — ネガティブな内容や、当時だったら嫌な部分の内容でも深刻な感じにならずに話してくれた。鮎の例でも最後の「死なないんだよなー」のくだりは皆で大笑いした。実話として嫌な気持ちもあるのに、一気に笑い話になってしまったのが不思議だった。鮎を

川に放した人の様子も目に浮かぶようで、人間らしさを感じた。鮎を

話し手の人柄のおかげで、こういう話題にユニークさが加わり、嫌な気持ちだけではない形で今知れることが嬉しい。また、笑い話だけでは収まらない出来事の周辺で起つた事実も伝わる。

N — 鉛毒による被害は広く研究されてきたが、このような足尾の住民が見聞きしたことや、古河が激動の時代に、当時の知識や技術を結集させて公害対策に取り組んだこともまた事実であると思う。様々な立場の方の色々な記憶を残すことが大切だなと思った。特に、公害対策に取り組んだ方々のお話を伺つていただきたいと思う。

ハゲ山のウド

【2014年2月10日】夫・妻・志村】

足尾では山遊びをしている方も多く、この「夫婦は山菜やキノコ採りなど、季節ごとに山の幸を楽しんできた。ハゲ山として知られる、松木エリア【3】も昔は遊び場の一つだった。昭和30年代までの松木の話。

妻 — 会社の社宅が松木の方にもあつたの。

S — 松木の奥にですか？へー。それはどういう人が暮らしていたんだですか？

夫 — 会社の人とか、
妻 — 製鍊所に通う人とか、本山坑に通う人、そういう人たちの

社宅があつたの。

S —あ、松木にもあつたんですね。へー。でも今つて、ゲートで仕切られちやつているじゃないですか[4]。昔は松木の方に自由に行けたんでもんね。

妻 —私も行つて、ウド採りなんかをして。

夫 —昔は松木にウドが出たんでね、

S —あ、そんなんですか。私はもうゲートがある状態から来ちやつているので、なんて言うのかな、松木は立ち入り禁止の場所ついていきイメージしかないんですけども。皆さんからのお話を聞くと、松木の川で遊んだり、松木を越えて中禅寺まで遠足に行つていた[5]とか、そういう話を聞くと、同じ場所なんだなと思つて。

妻 —いい所なんですよ。

夫 —こつからよく、松木の久藏を通つて、中禅寺にみんな行つたんですよ。

妻 —歩きで山越して。

S —ああ、なんか遠足とかで行つたつて聞きました。じゃあ、松木に遊びに行つたりしたんですか？

妻 —みんな、この辺の人なんかも向こうに遊びに行つたの。

夫 —採りながらね。

S —へー、ウドか。

夫 —山のウドはいい香りがしてね。旨いですよ。

S —へー。

妻 —いい所ですよ。

S —足尾のいろんな方の話を聞くと、キノコとか山菜とか山椒もそうですよね。山ウドっていうのは、普通のウドとは違うんですか？

妻 —違うの。あのね、山のこう、ズリ[6]って言う、砂になつて山が崩れています。その中にウドが出てくるんです。

S —へー。

妻 —だから、そこの中を掘つて行くと、白いウドが真つすぐに生えているんですよ。今はトンネルで作つていて、ウド、白い。あんな風なの。それもね、自然の山のあれだから、香りがいいんですよ。全然違いますよ。

S —今はもう松木には生えてないんですかね？

妻 —今はもうね、無くなっちゃつた。絶えちゃつたの。みんな採りに行つたりなんかしてね、根をみんな持つて来ちやう人がいるんですよ。

S —そうなんだ。

夫 —芽がいくらか吹いたから、

妻 —それでほら、今度は山の緑化が進んだでしょ。それなんであ

の木が生えると日陰になっちゃうから、駄目なんです。

S — あし、なるほど。ちなみに、その松木の場所って、その山に遊びに行っていた時は、やっぱりそのハゲ山だうたんですか？

妻 — そうそうそうそう。ハゲ山が多かった。

S — じゃあ全然、

妻 — 今と違つた。今と違う。

S — なんか、ハゲ山、ハゲ山って言われて、木がないっていうのは、頭ではわかるんですけど、どういう風景だうたのかがあまりわからぬと言つうか。

妻 — わかんないよね。

夫 — ウドなんかが出て、鹿とかなんかがみんな食べちゃう。新芽の上を。

妻 — ハゲ山っていうか、そうね、何で言つたら良いだろうね。あの、道路の所に石がいっぱいあつて歩くでしょ、石が一杯あつて。

S — 全部ですか？

妻 — 全部、山が全部そういう風になつていたの。

S — 砂利みたいな感じですか？

妻 — そうそうそう。そういう山なの。

S — じゃあ、土が無い？

妻 — ない。土が無いんです。

夫 — 昔の製鍊の煙で、岩がみんなやられちゃつて、粉になつちゃう。

S — へー。
妻 — 粉になつちゃうんですよ。岩が弱つて。それがそういう風にざらざらになつて。
S — 岩が弱つて、岩が更に碎けちゃうことなんですね。

妻 — そうそうそう。

S — それつて、危ないですよ？

妻 — 危ないんですよ。

S — ズルズルーって、登つても滑っちゃいますよね。

妻 — ズルーって、下まで行つちゃいますよ。

夫 — だから、行くとカモシカとかが落ちこちて、死んでいることがありますよ。

S — へー。でも、人間もそこでウド採つたんですね？

妻 — そうそうそう。気をつけないと。

S — 気をつけて、その這つて行って？

妻 — 這つて行って。

S — えー、難しそう。

【お話を聞いて】

S — 今の松木の様子と、岩が碎けるという表現で、初めてハゲ山がどういうものだったのかイメージできた気がした。偶然が上手く

重なり美味しいウドが芽生え、砂利山を這つてウドを探りに行く

風景もあつたんだ…と、驚き。そして何より、本当に楽しそうに、

美味しそうに話してくれたため、松木のウドを食べてみたかったと

思わずにはいられなかつた。

煙に慣れる

〔2014年5月19日—Fa, Fb, Fc (Faの娘)、志村、中山〕

商店出身の幼なじみのお二人。町部[7]からみた、銅山の社宅暮らしについてお伺いした。現在80代のお二人の話に、片方の娘さんと私たちが加わり、昭和30～40年代の様子を思い出してもらう。

S—ハゲ山についての話を伺うと、子供が山に遊びに行つても草が生えていないから姿がすぐ見えて安心したとか、煙が来た時に新聞紙を植物にかけていたというのも聞いたのですけれど、そういうのってあつたんですか？

Fa—そういう風にしないと、朝、煙が流れてくるんだよね。

Fb—製鍊の煙が朝に町部に来んですよ。

Fa—でね、みんなね、何か作り物をしている人は、みんな植物に新聞をかけたんですね。

Fb—新聞をかけたってね、隙間から煙は入っちゃいますよね、それでもいくらか違うんでね。

Fa—私もすっかり忘れていたけれども。

Fb—花の咲いている人はみんなね、そういうのやつた。

Fc—私の小ちやい時の昭和40年代前半もやつた。

Fa—あ、じやあ結構最近までのことではないんですね。

Fc—いやあ、だいぶ前だよ、ハハ。

S—やっぱり今の山の風景とは違うんですか？

Fa—全然違う。あのね、町部はそんなことないですよ。

Fb—赤倉、製鍊の近所ですね、あのハゲ山見るとね。

Fa—私ね結婚した昭和31年にな、嫁ぎ先の関係で赤倉に行つて1週間暮らしたんですけどれども、もう煙でね。初めて、同じ足尾にいてもね、もう真紫、煙が。もう喉が痛くて痛くて、いられなくてさ。1週間だから我慢していられたけれど、私、そうじやなければいられなかつた。で、あそこに住んでいる人はそれが普通になつちゃう。

Fb—でも、赤倉に1週間いたんだ。

Fa—1週間いたんだよ、お勤め、お勤め。ハハ。お勤めの意味でいたのよ。それでね、子供の時からそこにいた人はもう、平気ね。やっぱりその嫁ぎ先に住んでいた子供は煙が平気ですよ。やっぱり慣れちゃつてね。

Fa—そういうのあつたんだ。

Fa—だからあの辺の山はまるつきりのハゲ山。草一本生えていな

かつたもんね。

Fb — 茶色かつたもんね。

Fa — そうそうそう。今行くと青くなっているでしょ?

N — 天皇陛下も青くなっているのを見に来ますもんね【8】。

Fa — どのくらい青くなっているかをね。

「お話を聞いて」

S — コンパクトに感じる足尾の中だけれど、住民同士の「同じ足尾でも」わからない場所があったというのが住んでいる人の感覚のようだ。各地区で日常生活が事足りていたのだと思うし、煙が溜まる所と溜まりにくい場所がはつきり分かれているんだな」と地図を見ながら想像する。

N — 足尾に来て、住民の皆さんからお話を伺ううちに、煙害がひどかつた地域とそうでもなかつた地域があるということがわかつていつた。また、昔の写真を見ると、いかに足尾に緑が戻ったかがわかる。昭和30年に導入され、多くの女性が活躍した植生盤による緑化に関する聞き取りももつと行っていきたい。

公害の足尾というイメージ

【2014年8月20日、M・志村、中山、好井、Pa、Pb】

公害に関して聞きたかったポイントは、①生活の中にあつた風景や感じたこと、②銅山従事者として公害にどう向き合い感じて

いたのか、の2点。閉山後も銅山関係で働いていた方と、足尾育ちの市職員2人も加わり、それぞれの経験を交えながら、昭和30年代から閉山あたりまでのことを思い出してもらう。

S — 私が足尾に来る前はどうしても教科書の“公害の足尾”っていうイメージが強くて、実際はどうだったのだろうと思って来てみたんですね。煙が町に来た時に野菜というか、植物に新聞紙を被せたっていう話を聞きます。そういうことって、子供の時の記憶でありますか?

M — 結局、もう煙がせめて来るっていうのはわかるんですよ。もう、あの、いると。

S — えっと、それは煙に色とかがついているんですか?

M — 製錬の方から風に乗って、うん。やっぱり植木なんか大事にする人は多分そういう風にならんだと思うんだよな。

S — やっぱりチョリチョリになっちゃう?

M — あの、喉なんかやられたりなんか。うん。だけど我々が物心ついた昭和30年代はもうそういうのはなかつたよね。だからその前が凄かつたんだ。うん。だから通洞あたりは結局ハゲ山にはならなかつたから。うん。

Pa — たまたま山がガードになつていてるから。

S — やっぱり本山に向かつてのエリアなんですね【9】。



上:松木ダム 昭和35年。下:早春の釣り。芝の沢の下の川
(伊東信撮影)

M—田元交差点から本山の方は、そんなに酷い所はなかつたね。

Pb—ただ、やっぱり自溶製鍊が31年に出来た「10」後の俺が小学校低学年の頃だから、その30年代の後半くらいには松原まで煙が来て。やはり喉が痛い、目が痛いというのが、そういう日が年に

2、3回。

S—そういうじやあ、年に2、3回のそういう煙が町部まで来る時っていうのは、例えば通常よりも多く作業していたとか?

Pa—ガス抜きしていた。新聞にも載っているんだけれども「11」。

S—ちなみに他所から足尾を見ると、どうしても「公害」っていうイメージが強くなっちゃうて思つてます。そういうイメージうて、例えばMさんが働いていた頃には浸透してましたかね?

M—別に従業員の中では、公害に対する意識つていうのはただもう。その、閉山になつてからの方が騒ぎ始まつたから、そういういろ

いろなことです。

S—あ、閉山以降に?

M—うん。閉山前つていうのはそんなに大きな騒ぎっていうのは無かつたから。だから田中正造さんがどうのこうのっていうのは、

閉山の頃の従業員っていうのは、そんなあれ持つていなかつたから。その当時は。閉山になつてから、こういろいろ大きな騒ぎがだんだんだんだん出てきたような気がするね。そうだよね、閉山前、そんなんに大騒ぎしていなかつたものね。

Pb—そうですね。だからその煙、製鍊の煙にしても、親父は製鍊

だつたから別にその、「ああ今日は煙が酷いね」くらいの話しか。

M—ないね。

Pa—会社が悪いとかそういう認識はないですね。

M—それが日常だから。

M—我々だつて、全然公害がどうのこうのって、全然その、考えたことないもん。もう、なんて言うのかな、地域に密着して住ん

じやつているからさほどね、うん。大騒ぎしないけれども。逆に閉山になつてからマスコミが騒ぎ始まつたから、余計にそういう風になつてきて。

Pb—松木の山 자체、Mさんとしても俺にしても、もう生まれた時から、

M—ああいうんだから。

Pb—ええ、いわゆる荒廃のハゲ山だつたから。それが当たり前。

M—そういう感覚がないもんね。

Pa—そうですよね。

M—「何騒いでいるんだって、最初は、ハハ。何でそんな大騒ぎするんだろうっていう。ただね、下流方面でそういう風に大騒ぎしたっていうのは、そういうのはまだ耳に入つてないから我々には。うん、だからさほど、その公害に対するそういう考え方っていう

のは全然持つていなかつたよね。これで食べてきただんじもんね。

うん。ただ後からいろいろ話を聞くと、あ、酷いこともやつたんだ
な、つう感覚はあるけれどもね。今はね。

Pa 一下流は水の害。鉛毒で、地元は煙の害。……

M まあ、とりあえず足尾の人間なんていうのは、さほど公害に
対しての考えは誰にしろ持つていなかつたと思うよ。うん。

Pa 一でも、神子内川では泳いだけれども、渡良瀬川では絶対泳
がなかつたね。ハ。

M だからそれはね、徹底している。それはね、足尾の人間はや
らない。

S 一え、それはどういう理由からですか？

M 一結局、松木沢、久蔵沢と仁田元沢や、本山の出川が本山の
横を通つて流れに乗っているだろ。あの、神子内川はあの渡良瀬
の所で合流しているわけ。で、だからその渡良瀬の三養会の下
の所では泳ぐけれども、合流地点はその公害関係の水が混ざつ
ちやつているつてことで、その下からずっとここまで、

Pa 一誰も泳がない。

S 一そういうものだつて伝わつていたんでしようか？ 親とかから
教えられて、「じゃあ、その川で泳ぐのはやめよう」つていう風に
なつていた？

M 一向原の川の、川の近くまでは皆、川遊びしていたけれども、

渡良瀬川の近くはやらない。

Pa 一ダムより上は泳いでいた。

M 一そうそう。

S 一そうすると、やっぱり本山エリアの人たちつていうのは、ま
さに煙もだし、川の水も泳ぐのは控えなきやいけない、となり
ますよね？

M 一だから、本山関係の人らは山を越えて庚申川に遊びに行く
んだよね。

Pa 一舟石を越えて、旧林道。

Pb 一昔の写真を見ると、松木で泳いでいた子供の写真なんかが
結構ある。

M 一松木エリアにある松木沢、久蔵沢、仁田元沢の3つの川が流
れている所で良く遊んでいたもの。

Pa 一あそこは、ゲートができるまで遊んでいましたもの。

M 一そうそう、魚釣りなんかもみんな入つたんだから。あそこ、
Pa 一だから煙害はあつたんだけれども、河川の影響つていうのは
それほど無かつたのかな。

M 一沢釣りの人は随分入つただろうね、子供はガラス箱とヤス
でカジカやイワナ、ヤマメ釣りをして遊んでいたからね。……
我々はただ、「渡良瀬川つていうのは泳ぐ所じゃないよ」つていう、
そういう感覚は小さい頃から植え付けられているから。

Pa — 大黒橋の合流付近からが渡良瀬川って呼んでいたから。

D — うん、そうそう

S — じゃあ、神子内の方は違う?

Pb — まあ、わざわざ渡良瀬川で泳がなくとも、神子内川にして内内の篠川、そういう綺麗で淵のある川がかなりあつたから。

「お話を聞いて」

S — 足尾に来た当初、町部から見える渡良瀬川は透明で綺麗に見えたけれど、「人が住んでいる所の水では誰も遊ばない」と教えてもらい、「足尾の人は、どんなだけ綺麗な水で遊ぶんだ!」と驚いた。昔から教わっていた川の境目の話が、少しは今にも影響し

ているのかも……。公害について騒ぐつもりはないと言いつつも、川の泳ぎ分けの例のように確かに生活の中での意識はあった。改めて公害を考えてみると、他にも何か思い浮かびそうだしそつと住み続けていると公害を立ち止まつて考えることが難しいのかもしれない。

N — 住んでいると「あたりまえ」で疑うこともなく慣れてしまうことがあるのだと思う。社宅では電気、水道代がタダであったのだが「今でも時々水を出しつぱなしにしてしまう」という声を多く聞く。企業城下町であつた足尾の人々特有の慣れは、奥が深くとても興味深い。

1 瞞奥宗光の次男「潤吉」が古河市兵衛の養子になったことが縁で、眞奥宗光の別邸を柏木平に移築した。現在は残っていない。

2 「白い煙」が襲う。公害の原点「いまなお」〔朝日新聞昭和46(1971)年10月1日金曜日 栃木県版〕

3 高原木、安蘇沢など、足尾から中禅寺湖に向かうエリアなどを指す。

4 銅親水公園から松木エリアに向けての道には、足尾砂防えん堤上流工事用道路のゲートがあり、一般車両は通行禁止となつていて。

5 昭和60年代くらいまでは、小学校の遠足は松木から中禅寺湖までのピクニックが定番だった。往復8時間の道のり。

6 「研(ずり)」。本来の意味は磨石のことだが、粗鉄を含めた発破で起きたものが全般を指すようになった。(『村上安正・『足尾銅山史』、随想舎、2006年、600頁)

7 銅山関連施設のすぐ近くにある社宅や三養会エリア以外の商店街エリアのことを町部と呼ぶ。赤倉、松原、赤沢など。

8 平成26年5月21、22日に天皇、皇后両陛下が1泊2日の日程で栃木県と群馬県を訪問。22日には足尾の銅親水公園や環境学習センターを訪れ、松木地区の緑化をご覧になつた。

9 田元の父差点から松木に向かつての間藤、赤倉などのエリアを指す。

10 昭和31(1956)年、「自溶製鍊法」「電気集塵法」「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。
2の新聞記事のこと。

足尾小話「お客さんからのお土産」

昭和20～30年頃に子供だった方から見た、古河に勤めていたお父さんのお客さんの話。

のなんだな、お土産が。

ばお洒落なものとか、結構貴重なものだった時代があつたということを、聞いたことがあるようだ。

M一例え、私が今でもよく覚えてるのはね、鉛筆あるだろ。鉛筆1ダース、俺の名前が打たれているわけだよ。

M一足尾では、水力発電を自前で持っていたわけだから、他からの電気を使わずに銅山運営やっていたからね。

M一多分、私は昭和18年生まれだけど、その頃、まさしく小学校の低学年だっただけれど、そのころに、バーコレーターでコーヒー入れていた家なんてないぞ、あんまり。

S一あし、なるほど。

M一名前入りの鉛筆。

S一あー、版が押してあって金とかで名前が書いているやつですね。

M一そうそうそう。あんなの、カルチャーショックだぞ。

S一たしかに昭和20年代の話ですもんね。「凄いな」ってなりますよね。

M一うん。それから、今はこんなのがたりまえだけれども、電気の湯沸かし器とかね。

S一そういうの、当時もあつたんですね。

M一この間、子供の家に行ったら電気湯沸かし器があつて「これ、お父さんすぐ沸くんだよ」なんてね。

S一こんな陶器のお皿に置くとすぐ沸けちゃうんだよって言つてたけど、みんなの俺たちがガキの頃にあったよ。

M一それと、今思えば、そんな人たちは足尾に来るのに東京から自家用車で自ら運転して来るんだよ。

S一ハハ。でも、そういうのがお土産で……。へー、凄いな。

M一当然で、連中は東京から来るわけだから、お土産を持つてくるものはね、子供がいっぱいいる家っていうのを知っているわけだ。それでその人たちが来る

と、もうとも我々が目にしたことのないようなものくらいの世代だったかわかんないですけれども、やつを覚えてるよ。東京に一度行ってみたいなってね。

M一それと、今思えば、そんな人たちは足尾に来るのに東京から自家用車で自ら運転して来るんだよ。車種は何だったかわからなかつたけど、時代から推測するとルノーかオースチンあるいはビルマンあたりじゃないかと思うだけれど。子供ながらに、そんな自家用車がうじやうじや走り回つている東京でどんな所なんだろう……、と想像を膨らませたの

Q2 坑内ってどんな場所なのですか？



観光用新坑口工事中出口

昭和54年10月20日(伊東信撮影)

観光施設の足尾銅山観光^[1]では全長1234キロメートルある坑道のうち700mが公開されている。その先は柵越しにライトを照らしながらごく一部を覗くことしかできず、現在の足尾しか知らない私たちにとって、坑内は遠い場所だ。「坑内には野球場くらいの広さの空間がある」「坑内で、奥に見える光めがけて進むと10分歩いても、その光にたどり着かなかつた」などなど、足尾の人から耳にする坑内にまつわる話は、想像し尽くせない。今、実際に坑内で働いていた元坑夫さん^[2]から直接話を聞ける機会は案外少なくなってしまった。

坑夫のお父さんの仕事

「2013年7月11日—兄、弟、志村、中山」

昭和10年代後半に生まれ、昭和35年まで足尾で暮らしていたあ
るご兄弟のお話。小滝坑に勤めていたお父さんの仕事について、当
時の子供目線から覚えている内容をお伺いした。

S ーお父さんに、坑夫の仕事をことを何か聞いていましたか？ 変
な質問なんんですけど、「仕事は大変だ」とか…。

N ーやっぱり危険と隣り合わせ？

弟ーどんな感じなんでしょうね。私も自分の子供には、仕事の話を全然していないからな。ハハ。

兄ーでもなんか楽しそうに、集まりがあって、割とすぐに帰宅するという感じでしたかね。そんなに締め上げられて働くような感じではなかつたよくな気がするんですね。……でもね、なんか働いている時間は短そうなこと言つていたね。坑内では長くは働いていられないと思うよ。朝から晩までね。本当にまともに働いたら体がもたないですよね、きっとね。だから、親父は結構喜んで働いていましたよ。……（省略）……余暇とか娯楽、夏の日の長い時は仕事が終わると野球、テニスを楽しんでいましたね。また、若者は柔道、剣道をしていましたね。用具も施設も整っていました。あとはやっぱり神様っていうのかな、足尾の人は山を大事にしていたみたいですね。月1回は親父も朝早

く出ていくんですよ。一日は間違いなく行つていきましたね。「今日一日だって」言つて、いつもより1時間くらい早く出て、それでちゃんとお神酒かなにかをやるんでしょうね。見たことはないんですけどれども。

弟 それは坑内にあるんかね?

兄 一坑内の入り口かな? 坑内の入り口か何かに、ちゃんと朝、毎日一応はお参りはしているんだろうけれども、月一はちゃんととしていた。今日はお参りって感じで、服装もちゃんととして行つてしましたね。ネクタイなんかはしていませんでしたけれども。あの普通の人は、服装は鉱員だから作業服で行つちゃうんですけれども、普通の服を着て行つたから。ネクタイまではいかないけれども、その日だけはちょっと違うんだ、なんかね。

S 一そんな話は初めてですね。

兄 一月一、一日つていうのは僕は記憶にありますね。なんか、お袋なんかも弁当を作つたりするのがあるから、早くからやつていたみたいですね、そういうのは。

N 一あ、ちなみにお弁当の内容つていうのはどういうのだったんですか?

S 一やっぱり厚い弁当箱なんですか?

兄 一あのね、薄くなるのはずっと後ですよ、足尾は。

弟 俺が知つているのは薄い弁当箱だったけれども。

兄 一あそ、俺の頃はやっぱりドカベンといわれるものですよ。でかいやつで。ドカベンですよ。

S 一それにお米とおかずなんですか?

兄 一一緒ですね。

弟 思い出してみると、イカの塩辛を梅干しのようにお弁当箱の真ん中に埋めたおかげが大好きでしたね。

S 一ちなみに、ちょっととネガティブな話になっちゃいますが、事故の情報は社宅にもすぐに伝わってくるものなのですか? あんまり子供だったから記憶ないです。

弟 一俺の記憶だとすぐわかる。外で遊んでいるとサイレンが鳴る。

妹 一そうすると周りの大人たちが、ざわざわざわざわざする。すると誰かが、「あーだ、こーだ」って話になる。サイレンっていうのはね、毎日定時には鳴るんですけどもね、鳴らない時間に鳴る時があるんですね。そうするとそういう落盤の事故なんですよね。

兄 一何回も聞いたことある。

弟 一うんある。そんな話しある。しゃべりうつていうか、まあ、あるわね。だから親父だって部下の人たちにはよく言つて、いたらしいのですが、「下着だけは綺麗にしておきなさい」とつて。

兄 一何があつてもいいようにね。僕もそういう話はあつたけれどもね、直接あつたのは、僕の同級のお父さんが事故で亡くなつた。その話はよく知つている。そこでやっぱり葬式。その葬式がやっぱ

り凄いんで記憶にある。それしかないですよ。葬儀には、樂団のビッグ・バンドが入るんですね、ブラバンの。それだけは覚えているんですけれども。

S — その演奏はやっぱり、古河がやってくれたんですかね？

兄 — そうでしょうね。やつてくれたんだでしょうね。

弟 — 楽団っていうとそれ古河だ。

兄 — 事故の記憶といえば、それ一つしか知らないんですけども。

「お話を聞いて」

S — 他の人からも教えてもらった葬儀の話題と通じる所がある。「下着だけは綺麗にしなさい」と声を掛け合つたり、山の神様を大事にしていたという習慣は、理屈どうのこうのを越えて、動いている人ならではの感覚や常識のように感じる。

N — 葬式に古河の樂団が来たことに驚いた。足尾に来て、古河

が手厚い福利厚生や文化活動を奨励したことによく耳にする。付属の学校や病院もあつたし、家や道路の修理まで行つたといふ。また、運動会やお祭にも力を入れ、それらの写真を見ると信じられないほどの盛り上がりを感じ取ることが出来る。

M — それを、自分で作るんだよね。

S — へー、作るんですか。一人ひとり作るんですか？

M — 自分で照り返しみたいなのを作るのさ。それを作るには、電話のベルかな。電話のベルなんかを、ダンダンダンダンって叩いて。

カンテラの光

【2014年1月10日】M、志村、中山】

M — カンテラとか銅山の道具一式って、やっぱり皆さん自分のものを持つていたんですか？ 当時働いていた人は？

M — カンテラから始まって、途中でキャップランプ「4」になつたから。カンテラを大事にして、ほとんどの家があつたかもしないよ。だから、キャップランプになるまでは、みんなカンテラをつけて行つたから、山でもなんでも。男体山行くのでも、カンテラで行つたらすぐわかるんだよね、「足尾の人が来ているな」なんて。

S — えー。

M — もう、カンテラの光が違うから。「おお、誰だ、あれは？」って全然違うから。こうやって、山歩いていると、男体山登りなんて、「あれ、足尾の人か？」「あれ本山のあれだよ」って。

S — 光でわかるってすごい。

N — カンテラってどのくらいの光が出るもんなんですか？

M — あれね、火が出るでしょ？ やつぱりそのままじゃ駄目で、やっぱり照り返しつていうんかね。

S — 丸い部分のことですか？

M — それを、自分で作るんだよね。

S — へー、作るんですか。一人ひとり作るんですか？

M — 自分で照り返しみたいなのを作るのさ。それを作るには、電話のベルかな。電話のベルなんかを、ダンダンダンダンって叩いて。



通洞坑口前にて記念撮影 砂烟主婦の会 坑内見学(伊東信撮影)

S | 坑夫さん以外で坑内に行ったことのある人は少ないので、
何人かの女性の方から見学に連れて行ってもらったという話もたまに聞く。

S —へー。

M —それが一番良いう。それで磨くんだけよね。真鑑磨きっていって。

S —磨かなくちゃ駄目なんですか?

M —鏡みたく磨かなくちゃいけない。

S —ちょっと見たくなる、その磨いている姿も。

M —それを自分で、真鑑を丸く切つて、真鑑の板があれば切つて、トントントントンと叩いて突くの。それを、もう暇さえあれば外してこう、中でも仕事の合間とかに磨くんだけよね。それは自分があれだから、だから、「何メーター先まで俺のは見れる」とか。

S —やっぱり上手い人は、ずっと先まで見れるのですね。

M —あんまり真鑑部分をでかくするとね、邪魔になるとかあるけれども。本当にね、バーッと明るく、

S —凄そう!

「お話を聞いて」

S —カンテラが懐中電灯のように山登りなどでも使われてい

たことが面白い。自分で手直しも出来て、案外使いやすいので

は。他の人も、カンテラの中に入れるカーバイトで火遊びをし

ていた、という話もよく耳にすることから、一般的な道具だつたようだ。

N —手作りのカンテラにはそれ愛着や誇りがあったようだ。話にもあったように、カンテラが使われなくなつてからも、ま

た閉山になつてからも自宅で大切にしている方が多く、何度も見せていただく機会もあつた。

坑内の職場

【2014年9月18日—M、志村、中山】

坑内の線路を作る線路夫だった方のお話。閉山までの坑内の日常や感覚。

S —なんかあの、銅山観光とかでは、エレベーター「5」みたいなやつを見たりするんですけど、あれに乗る時って、振動だうたりスピードも結構早いんですか?

M —早いね。遅いのと早いのがある。

S —あ、遅いのと早いのがあるんですね。

M —場所によって早い所と、遅い所がある。ケージの枠が見えるんだから、枠がくつついでいて、枠が見えるわけだよ。

S —結構怖くないですか?

M —怖くはない。

S —怖くはないんですか。へー。

M —危ないんだよね、手なんか出していたらやられちやう。だって、手出ちやうもん。

S —ですよね。本当にあの枠の中にピタつと収まって動くん

すよね。

M — 中には10人乗れるようになつてゐるんだよ。

S — 10人も乗るんだ。

N — エレベーターでの怪我、事故も結構あつたんですか?

M — えー、落つこつたこともあるんだよ。落つこうちやつて。

S — 落つこちちやう。

N — じゃあ、もうそしたら?

M — 繩が切れて。

S — えー、怖い。そうするともう全員ですよね。一気に本当に450メートルとか。

M — そうね、最初に300メートル。そして、また違う所に150メートル下に行くから、450メートル地下。足尾ではそこが一番深いね。落つちやつたのはたまたまだよね。ブレーキがあるんだけれども、効かなかつたんだよね。落つこちてね。

N — え、じゃあ全員お亡くなりになつた? その事故の時は?

M — いやあ、その時は一人くらいだつたんじゃない?

S — あとは怪我とかで?

M — べつちやんこだよね。

S — やー、怖いですね、本当に。 :

N — 坑内での、300メートル下の熱さつていうのはどんなものですか?

M — 足尾では一番下が、300メートルから更に150メートル下るから合計450メートル。坑内の温度は34度はいつでも、湿気が凄いんだよね。

N — そうすると、仕事も何時間も出来ないですよね?

M — もう決まつてゐるから、時間で。長時間動くことなんて、出来ない、出来ない。で、俺らみたいに熱い所で働く時は7時間。普通の所は8時間働く。下は7時間で、手当がつくんだよね。だって熱い所に行つてゐるからね、ハハ。クーラーが坑内に入つて、るんだけれど、歩く廊下の所には涼しさが届くんだけど、作業の所までは届かないんだよね。

N — でも、7時間ずっと、そうなんですか?

M — いやあ、仕事をやつてゐるのは12時半くらいまでだよ。それ以上はやんない。その後は飯を食つて帰つてくるようだから。飯を食つてそれで「ああ、帰らな」つて言つて、坑口に2時に出でると、判座【6】をかけて、風呂に行く。

N — じゃあ、え、ごめんなさい。出勤が何時ですか?

M — 7時。坑内関係は、朝7時から始まつて、熱い所で仕事をしている人は午後2時まで。2時までに坑口に出てくる。他の人は2時45分まで。

N — で、7時から2時間くらい仕事をして、まあ、それはもう、そういう感じで【7】。

S —いろいろ、移動とかありますよね? きっと坑口に入つてくのも。作業の場所に行くまでも時間がかかるものなんですか?

M —そこは電車が出ていたでしょ、だいたい4キロかな、俺らがいた時は。4キロ。4千メートル。それで、帰りは歩くだろ? 4キロ歩くだろ?

S —じゃあ、本当に、移動でも時間がかかりますよね。へー。

……(省略)……

S —いやあ、凄いなあ。全部人力で線路を敷くんですよね、凄い。でもそういう人力で、例えばですけれど、線路を坑内に1日で何メートルくらい作れるんですか?

M —いやあ、何メートルってことないよ。あれは。18尺のレールを半分に切つてから運ぶんだよね。じゃないと上がつていけないがね。

S —材料 자체をつてことですね。じゃあ、そうやって材料 자체を半分にして運んで、で1日作業をした場合つて、例えばどのくらい? M —いやあ、……あれをだつて……発破かけたつて、1メートルくらいしか進まない。発破をかけると1メートル。線路の作業は、線路を半分の9尺にしてそれを担いで坑内で運んで行くだけれど、3日か4日作業を続けないと線路が入る大きさにならないからね。あとは、ズリをとる人が線路を「延長してくれ」って言えば、俺がそこに行つて延長するわけ。そうじやなきや行かない、



昭和28年 朝の出勤入坑(伊東信撮影)

俺も。とにかく裸だし、本当はおつかないんだけれどもね。熱くて

いられないがね。便所場もああいう、どうしようもないよ、坑内

だから、どぶ。どぶが流れているから、そこに小便でも何でもし
ちゃうんだから。下で顔洗つてあるんだから、

S、N——えー、

M——だつてしようがないがね、分からんんだから。

S——全部一緒になつてあるんだ。

M——する所ないがね、あんな所で。

N——え、あのそういう下水つていうのはどういう?

M——掛樋⁸って言うんだね、俺らは。掛樋つて、どぶとは言わな

いんだよね。

S——でも、水はあれですよね、きっと坑内から染み出でている水と
かもそこには流れているんですね?

M——そーそーそー。そういうのも流れている。で、飲む水は別に

みんな持つて行くわけ。鉱車の中に水を入れたり、パイプで水を

引いたりしているから、そういうのは大丈夫だよね。飲んだり食つ

たり。あとは「飯食うのは電熱器で熱せられるから。坑内の中

が熱いから、パンツ一丁みたいになつて仕事をするんだよね。みん

なね、熱いのが分かっているから。こんな長ズボンなんか着ていた

ら、動けないよ体が。

S——汗で多分濡れちゃつて動けないですよね、服が。へー。そう

なんだ。

S——坑内での事故の話も聞くのですが、事故つていうのは知らな
……(省略)……

いうちに酸素が無くなつていたとか、そういうことですか?

M——酸素がないんじゃなくて、ガスが発生するんだよね。ガス
が、ガスで死んだ人もいるし。あとは落盤つてつきものだから

が、落盤。

N——一番多いのは落盤事故が多いんですか?

M——そーだろうね。落盤は多い。そういう所にあんまり行かない
けれどもね、落盤。

S——そういう、例えば落盤事故とかにあいややすい危険な職種は
あつたんですか? 例えば、最前線の進鑿とか。

M——進鑿は進鑿。発破かける専門だから。余計なことやらな
い。絶対に、もう。それで、支柱さんは柱を作るから。水や、鉄管
は水が専門。俺らは線路が専門。だけど、やっぱり頼まれて手
伝うことがあるんだよね。「今日は悪いけれども、手伝ってくれ」
て。それで一人で夜中に坑内に行つたことがあるよ。一人で入つて
行くんだから。一人で坑口から4キロ離れた所に歩いて行つて、
300メートル地下へ下へ降りて行つて。それで切羽⁹へ行く、

地下へ入つて仕事やつてくるのさ。

S——一人で、その暗い所に入つて行くのって、怖くないですか?

M — 悪いと思つたことはないよ、ハハ。悪いと思つたことはないね、それは。ただ、嫌だなって、いうのは、「ここ、昨日人が死んだんだな」っていう。そういう所には行きたくないよな。そんな訳でね。「ここで、死んだんだよ。昨日」なんて。そんなのあるよ。

……(省略)……

N — 1回こうやって坑内の方からのお話を聞いて、いろいろ想像はするんですけども、やっぱり絶対見てみないと分からぬものですね。そういう地下300メートルの様子っていうのは。

M — は、経験しないと分からない。あの坑内が、300メートルか、3キロになっちゃうと、地震つてあるだろ。坑内だと地震じやなくてね、盤ぶくれ【10】。

N — 盤ぶくれ?

M — 坑内に座つていると、盤ぶくれの衝撃の風で持ち上がつちゃうの。ボカンと。凄いからね、あれ。

S — え? ジャあ、座つていると風でフツと、体が上がるっていうことですか?

M — 飛ばされて、線路を引いたやつがみんな壊れちゃうから。ぐちやぐちやに。

N — はー。

M — また仕事をやらなくちゃいけない。

S — 大変だ……。

M — それと、俺らはもう、「絶対、坑内では口笛を吹いてはいけない」と言つて言うだろ?

S — それは、どうしてなんですか?

M — 山が怒るって言うんだよね。山が暴れるって言うんだよね。事故が起きる。何かそういう話は聞いたよね。赤い着物は駄目だとか。

S — それは、事故の時の赤い毛布を連想するから?

M — なんでも赤いのがいけないって。口笛は駄目だとかね。響くんだよね。

S — ふーん。あそつか。坑内の中つて静かなんですか?

M — 静かだよ、何にもないよ。

S — なんにもない。

M — だけど、閉山後にポンプが調子悪くなると頼まれたんだよ。「悪いけれど、ポンプ見てきてくれ」なんて。それで、一人で行つて歩いたけれど、何かあの掛樋、どぶね、坑道の脇に水が流れている所。そこを歩いていると、カラカラカラカラ音がする時があるんだよ。そうすると、電気の球、あれが引っかかるつている時があるんだよ。カラカラカラカラ。気持ちよくはないね。

S — ちょっと怖いですよね、なんか。

M — ああ、「ここで人が死んでいるんだよな」って思つても、あんまり気にしない。そういう思いは一杯あるね。

「お話を聞いて」

S —サクサクと感情的にならずに話してくれた印象。事故の話や、一人で暗い坑内に入つて行く所も誇張せずに淡淡と話しつづけてくれていて、それが余計、実際に仕事をしている人の感覚のように感じた。

N —坑内の話は迫力があつて、まるで異次元の空間が広がつて、るようには感じられ、まさに想像を絶する。熱気、蒸気、爆音、爆風、さうには盤膨れ……。そんな死と隣り合わせの世界での仕事をわかりやすく説明して下さった。

- 1 足尾にある主要坑口のひとつである通洞坑の一部を利用して作られた坑内を見学できる市営の観光施設。
- 2 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語言い換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記するが、この冊子では現地の方が使つてきた言葉をそのまま掲載している。
- 3 「カンドラ（オランダ語 Kandelaar）」ブリキまたは鉄板製容器に油を入れて、灯心を灯した。（村上、前掲書、611頁）
- 4 キヤップランプ（Cap Lamp）頭上灯。ヘルメット前面の引掛金具にランプを固定し、灯源との間はゴム管やキャブタイヤでつなぎだ。灯源は腰のバンドに固定する。（村上、前掲書、611頁）
- 5 垂直に開けた坑道で、運搬、排水を目的にした大立坑を、ケージと呼ばれる稼働屋根と鉄骨構造のエレベーターのようなもので移動する。
- 6 「判座（はんざ）」作用員の出退勤を示す就業票。（村上、前掲書、614頁）
- 7 改めて一日のタイムスケジュールを伺つてみると次の通り。→8:00 坑口に出勤し判座をかける。↓坑内の作業場まで移動する。→9:00 作業場に到着し、作業を行う。→12:30 作業を終わらせ昼食をとる。→13:00 坑口まで移動する。→14:00 坑口に到着後判座をもらって風呂に入つて帰宅。
- 8 「掛樋（かけひ）坑道の側溝。（村上、前掲書、609頁）
- 9 「切羽（きりは）」切場、切端とも書く。坑内作業場のこと。（金属鉱山研究会編集『鉱山用語集』、東甲社、1976年、17頁）
- 10 「盤ぶくれんふくれ」。坑道の側壁が地圧により歪み、開さず当時の坑道断面にくらべ開さく空間にふくらんでくる状態をいう。側壁崩壊などが発生しやすくなり、坑道保持ばかりではなく保安上大きな問題となる。（金属鉱山研究会編集、前掲書、19頁）

足尾小話「坑内でのユーモア」

「坑内のなーんか、見逃しているんだよな。ユーモアがいろいろあったからな。」と振り返る方から、坑内のある場面を教えてもらった。

M—仕事が始まって坑内に入つて行くと、誰かが「俺なんか風邪気味だ。調子悪い。胃の薬くれ」なんて言つてな。「胃の薬飲むんだってボット持つくるんだわな。」なんだお前にここにあるボットに入つてある水を飲めばいいのに、それ飲まないんか—なんて聞いて。

坑内には小滝の方からわざわざ水を引いてあるんだけどね。「いやあ、あれだから、冒冷まで飲んでるんだよ」なんて言ってその後「薬飲むからその水くられやでさ。ハ、その水で薬飲んでき、「いやーこれは風邪に効くよ。いべんに直ちやうな」って言うんでおかしいと思っていたら、中に酒が入つているんだよ。

S—え〜ハ。水じゃないんですね。

M—水じゃない、酒だよ。どうか行った時に飲むんじやないか、酒持つていておいて。言わないんだよな、周りから。「後で気をつけろ」なんて言うんだけれどもな。「言うなよ」なんてな。「係員やみんなに言うな」

て。「じゃあ今度俺も持つてきて風邪薬飲むべ」なんて言つて

S—ハハ、へー。

M—だから坑内の中にもデータラメがいたり、頗知が利くんだよな。やっぱり飲んべえはね、なかなか上

手いよ。坑内の中でもわかんないよ、喫飯所だつてさ

「あれ、このくらいの簡のあれがあつたような?」なら「って言つていて。「なに? ナンギしている? なんだ」と言つてな。「あのプラスチックの鉄管みたいなあれ、持つてくれや」なんて言つて、開けてみたら升瓶が入つているんだもの。「あれ!」なんて。

M—喫飯所の端っこに隠しておくんだ。「ここなら見つかんない」なんて。「あそこに「升瓶入つていたよ、飲んでたよ」なんて。みんな知恵を出してな。それと、でかい薬缶があつて、係員が回ってきた時に「何だこれ、何か煮ているのか?」なんて聞かれて。ヤカンで煮ているんだよ、芋煮たりしているんだよな。係員が来て鍋なんてかけていたらわかつちやうがね。

S—その見回りに来ている人は監視に来ているんですか?

M—課長、局長とかあいうのが、ほら、一箇所だけじゃないから、坑内を回つていて「みんないるかな?」と見るんだよ。「ご苦労さん」なんて。そういう「ダメダメ」やつているから。ヤカン煮た時はお汁粉だとかね。坑外にいた時も「おおお汁粉だ、お汁粉だ」って言つてな。

……(省略)……

M—そういう坑内のユーモアな話だとかな「中はこうだよ」ってわかる組夫の人も今はいないべ。まず組夫だって、秋田からも来ているんだから。いろんな人がダーツて来るから仕事で機関場に入つてもわか

んないよ。仕事中にその人たちが「ナンギしているか

べつて、なんとか方言で一生懸命しゃべつているんだわ。で、「難儀している」とか、こっちも「ん」はつきり? って。この、言葉が上がつたり下がつたりするのも違うし。鉱車のことも秋田では箱と言ふから「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわからなかつたり。

あとは「どぶ」のことを、掛樋つて言つたり。その、あればあるんだよ。やっぱり向こうの人らも、向こうにあ

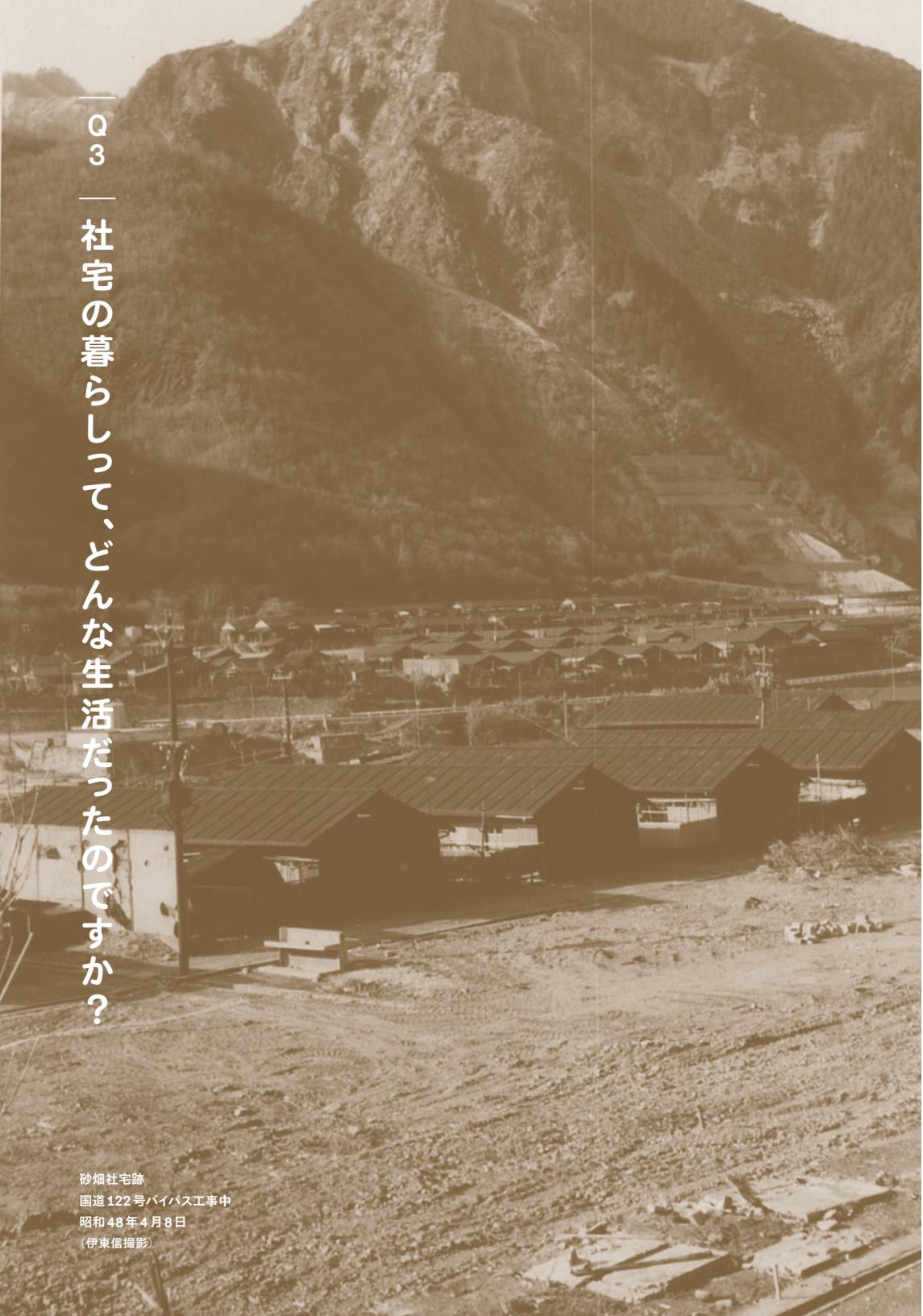
る鉱山で働いてきたんだべ、でも鉱車のことを箱つたり「大変だ」と言つるのは「難儀している」と言つたり、「困つて」で良いのに。京都弁みたいなやつとか、そういうのは「何言つているんだよ」って。だけ

ど、聞いているとわかるんだよ。何があつたっていうのは、だから「とにかく、そこへ行くか」って。ハハ。そういうあれがね。聞くと秋田の人だったから。訳を聞いても、いちいち秋田弁で言われても……。

一同—ハハハ……、

Q 3

—社宅の暮らしつて、どんな生活だったのですか？



砂烟社宅跡

国道122号バイパス工事中

昭和48年4月8日

(伊東信撮影)

私たちの職場足尾総合支所の周囲には一軒家や中層住宅が建ち並んでいるが、このエリアも平成10年頃までは社宅が並んでいた。当時の写真には、びつしりと黒い屋根の社宅が集まっているが、信じられない程の人の多さが際立っているような印象を受けた。現在でも足尾内の限られた場所ではあるが社宅が残っている。共同浴場、共同水場、共同トイレのことや、役職によつて社宅の造りが異なるなど、町で会う多くの昭和生まれの方は何かしらの思い出や経験を持つついて、社宅暮らしはそんなに昔の話ではないことに気づく。

鶏小屋にみえる

「2013年11月26日—夫、妻、志村、中山」

平成8年から始まる通洞社宅解体まで、社宅暮らしをしていた元坑夫さんに色々な話を聞いてみた。社宅の暮らしの話題になつた時に、少しずつ奥さんが話に加わってくれた。

夫——ただ、同じ古河でも炭鉱の社宅の造りと、足尾みたいに面積のない所での銅山社宅の作り方の違いがあるのはわかるね。もしも足尾に広々とした土地があるんだたら、13戸並び9戸並び、6戸並びの建物が連なつているような社宅っていうのはあり得ないよね。だから、閉山後の銅山観光オープン時に他所から訪

れた子供が、わ鉄「1」に乗つて足尾に見学に来た時に「わー、鶏小屋だ。なんでこんなに鶏小屋があるの?」と不思議がつていたと話を聞かされた事がありましてね。確かに言われてみれば、子供心にそう映つたのではないでしようかね。鶏小屋と同じように見えたんだろうね「2」。……それだけに貴重な銅山社宅なんですね。私の様に社宅育ちの者からすると違和感が無いけれど、当時訪れた人たちは心打つものが大きかつたと思います。

妻——その社宅の様子が珍しかったんですね。
妻——鶏小屋だってね、電車の車窓から見る感じでしょ。まあ、他にもいろいろ社宅が見えますけれども、もう社宅がびつしりあるわけですよ。鶏小屋とかね、もうそれを聞いて私たちも良い気持

ちはしないですよ。そういう話はよく聞きましたよ。

S — そういう話はあつたんですか？

妻 — そういう風に、鶏小屋のように見ちゃうんですよね、他から来た人たちには。

夫 — 銅山観光オーブンの時は大間々方面に行く途中にね、養鶏場があるんですよ。そうすると、その養鶏場が言われてみれば、社宅のような形で並んでいるのね。だから、初めて足尾に見学に来てわ鉄の車窓から町を見ると、社宅がそう見えちゃったんだろうね。段違いに並んでいるから。

妻 — 足尾は線路沿いもみんな社宅でしょ、平屋で全部社宅だからそういう風に見えますよね。それに、1棟が長いでしょ。本当に1棟に5軒も6軒も世帯区分されている。私たちが渡良瀬にいた頃は1棟9軒並びに入ったこともあります。それが一番長かったですね。あとは5軒並びとかね。もう4軒とかいろいろでしきれども、場所によってね。狭い所はやっぱり長く作れないから短がつたりね。だからね、そのくらいあれですよ。鶏小屋の方が幸せだよ、あんな綺麗な所に住んで。ハハ、酷いでしょ。

夫 — そういうふうに、言つたってね。ショックだけどね。

妻 — だってね、本当ベニヤ板で隣と仕切っている造りで、仕切りぞいに家具を置いていてね。隣の声は聞こえるし。隙間風は入るし、フフ。今思えばね、それが懐かしくてね。



昭和28年 中才社宅及び砂畠一部(伊東信撮影)

S — ああ、そうですか。

妻 — 今のような一般的な一軒家に入っちゃうと、本当ですよね。声は聞こえなくて、ちょっと寂しい気がしていますよね。昔はね、隣で何があつたり、何かあれしていると声が聞こえたりね、人の話が聞こえたりしますけれども。今はもう、サッシになっちゃうと静かなもんです。夏場なら網戸にしていれば聞こえますけれども。ハハ。

「お話を聞いて」

S — 最初は旦那さんがお話をしてくれていた中で、社宅の話題になつた時に奥さんが話に加わってくれたのが嬉しかったし、印象的だった。女性の方が社宅にいる時間が長いから、やはり話題があるのかもしれない。鶴小屋と表わされることに「いゝ気持ちがしない」とはつきりしながらも、話しているうちに社宅の賑やかさや不便さに対して、親しみを持つて懐かしんでいるようだつた。

N — 今ではだいぶ少なくなつた社宅も過去には町にびっしりと軒を連ねていた。当時の写真やお話をからそこにあつた生活を想像すると、現代が失つてしまつた大切なものがあるように思われる。

夢のような近所付き合い

「2014年1月10日—夫・妻、志村、中山」

社宅エリアでの人とのやり取りの様子など、風景が思い浮かぶように自然に話してくれる。「一方で、当時の人付き合いなどを話していくと当時と今の生活の違いに気づいていくように話が進んだ。

妻 — 社宅の中では今日あつたことみんな知っていますよ。

S — 社宅の皆さんですか?

妻 — 「今日こういう事故があつた」って、みんな。

S — それは人づてとかで?

夫 — もうなんでもすぐわかる。そこらに共同風呂があるから、誰々が入院したとか、誰々がどうしたとかね。あとは、丁度子供を産んだ頃に、親の自分が風邪をひいたらしくて子供だけで風呂に入れられないから、「誰か連れて行てくれるけ?」って頼んで「はいはい」って。「誰か子供を風呂に入れてくんねえかな、母ちゃんが風邪ひいてしまつて」って言うと、おばさん「はいよ」なんて子供をお風呂に入ってくれた。だから、今考えると夢みたいだな、って。

妻 — そういうあれはあるわね。

夫 — だから、知っているおばさんが「ああ、任せておけ」って子供



共同水場（伊東信撮影）



S | 現在残る社宅エリアの一角。手前の砂利道にも奥に写る造りと同じ社宅があったのだが、住居者がいないため平成26年に入つてから建て壊された。

を風呂に入れてくれてさ、そしたら違う人が子供を連れて戻してくるんだから。だから風呂に入ってくれる人と着物着せる

人は違うんだ。赤ん坊なんて平気だよな、そのくらいね。

妻 やつぱり楽しかったですよね。あれがね、人との交流がね。夫 交流がね。「どうした、どうした」って「誰々が入院した」とか、どうとか。「大変だ」とか。

妻 今、本当に新聞でも読まなくちゃ。

夫 新聞読んだって、近所の人が何やっているのかわからないんだから。本当にわからないんだから。

妻 一市営住宅だってね、同じ階でも数件の人にしか行き会わないでしょ?

夫 だから近所の人が何やってんかわからない。始めはこんなんじやなかつたんだよな。

妻 始めはなんだかんだ。

夫 そのうちだんだんとな。

妻 一で、今なんか誰が入院していて、誰が何処に行つたかわからない。まあ都合並になっちゃったのかな?

夫 ハハ…。

妻 社宅があつた時には、もう絶対に鍵なんて閉めないですよ。

夫 そうだよね。荷物だってさ、宅急便とかの荷物が留守だつたら「隣置いておきました」だったからね。「Mさん、いなかつたから

隣置いてきたよ」なんてさ。

妻 言つていて、置いて行つちやうんだよね。でも今はお隣に「荷物頼んでも良いですよ」って言うけどやつてくれない。だから、それだけやつぱり違いがあるんだね。

夫 まあ手が回るから、「○さんこういんだよ」って、昔はそういう風に「預けてきたよ」なんて言つてね、

妻 干し物なんか、雨降つているとみんな仕舞つて、

S 近所の人が。あ、確かにそういう、洗濯物のことも…、

夫 そういうんだつたし、なんかな。

S あー、なんでなんでしょうね。

夫 なんでなんだかな。

妻 今はもう鍵がかかつっているから、入つて行くこともできない。ね、大変なことになっちゃつて。

夫 「ピンポン押すと、「誰ですか」なんて直接来た方が早いつて思つんだよね。そうするとさ「誰ですか」なんてやつてゐるから、「俺だ」なんて。

妻 だから今みんな鍵を閉めていますよ、一人で暮らしている人は。私らは鍵を掛けられないけれども。

夫 鍵掛けているんだよな…。

妻 そうして、鍵を二重に掛けている家もあるしね。「ちょうどお待ちください」って言われて待つてつと、

夫 — 鍵を開けきんない。

S — 開けるのが、大変になつちやうんだ。

夫 — それが、最近来た人じやないんだよな、昔からいる人なんだよな。その人がそうやつてんだからたまげるよな。

妻 — 「何、お宅鍵を二重に掛けているの?」つて。……（省略）

……干し物だうて何だうて雨に濡れたうて構わないって感じだから。

夫 — この前も下づぶ濡れになつちやつてな。布団なんか取り込んでもやりたいけれど、余計なことして怒られちゃうのもな。大声で「雨降っているぞ!」つて言つたよ。

S — ハ。

夫 — でかい声出してさ、「いるんけ、いるんけ?」つて。

S — へー、本当にそういうことは変わつちやつたんですね。

夫 — 他の地域でもそうなんかね。

妻 — どうだらう。変わつたんかね。わかないけど。……昔はやつていまつたよね、「お茶飲みしよう」つて言つてね。

夫 — 昔は家にあがつていつてな、喧嘩つけんだよな。「わー、あが

れ、あがれ」なんて言うと、すぐ焼酎出してさ、ハハ。危なくてしそうがないから。「一杯だ、一杯だ」なんて言うのが、夕方になると

「今日はMちゃんが来たから」つて言つてさ、今度は焼酎こんなに入れてさ、「もう、飲んでくれた」つて言つてさ、飲んでくれたって喜んでさ、だからもう……、時代が変わつたって言

うけれども、相当違うよね。人が生きていれば同じなんかもしれないけれどもね、年寄りの人人が変わつたなつて思うよね。

妻 — でも、あの一人暮らしの人は大変ですね。みんなくらか認知症がでてきていますね。まあ、私らもそういう、通る道になつているんでしょうね。

夫 — 通つているよ。俺は、「おー」なんて言つて電話かけるけれど、こつちに来て「あれか、あれか、名前知らねえわ」なんて覚えてなかつた。

S — でも他の方も、人との近所付き合いが無くなつたとおっしゃつていました。それで、一人暮らしの方の孤独死の話になつたのですけれど、たまたま散歩していた時に電気がずっとつけっぱなしやつたんですつて。それで、近所の人に聞いてみても「今朝は見たよ」と言つことだつたけど、ずっと電気はついていた。それで、やっぱりそこのお家の方が亡くなついたらしいのですけれども。だから、ちょっとと声をかけることが出来なくなつているんだなと思って。

……（省略）……

妻 — だからね、なるべく声かけるようにしたいんですね。だけどね、やっぱり年寄りの家に行つて良いんだか、悪いんだか、わからないんだよね。あの、お金が無くなつたとかね。そういうのあるからね。

S — あー、そういう風になつちやうんですね。

夫 お金が無くなっちゃったとかで、そこに置いておいて、忘れちゃったと言つても認知症だから、後であつたなんて言つてもな。

「誰かさんが来たらお金無くなつた」って言うのが一番おつかないから。「どうしたよ?」って行けないんだよ。

S うーん、確かに。

夫 お金、やっぱりボケなんだよな。お金あれしたのがわからなくなつちやうんだから。「鍵、鍵、鍵」なんて言つて探しちゃうんだから。だから、ね。そういう「あー、あの人はあれかな、あの人はいるのかな、いるんかな?」とか、そういう風にしか思えないんだよね。

S うーん…。

妻 「見たよ」なんて言う人もいるから「あ、じやあ大丈夫だね」って言うけれど。最近は家を通りかかって、あの人はいるなとかね、

夫 本当にね、考えちやうと本当に忍びないな。「昔みたいのがなつて言う人がいるけれど、本当に…」

妻 昔はね、「なんかいたけー」なんて言つて入つてしまつやうの。

S ハ、戸を叩かないで?

夫 「いたけー」なんて言つて、「はい!」なんてつて。そうすると、家の中まであがつてきちゃう。

夫 違うもんな。「母ちゃんいるか?」とかね、そういうんで、ああ。まあ現代のあれにしてつけど、一生懸命喧嘩しないように、

あれしないように。

「お話を聞いて」

S 「夢みたい」な社宅の近所付き合いの話をしながら自然に今へと話が広がつた。話し手のお二人も「そういえば、今は違う」と改めて気づいていく感じだった。「昔は近所付き合いが強い」、「時代が変わった」という考え方には知識として知つてゐるつもりだったけれど、この話にある豊な生活感や人とのやり取りがまるつきり変化して寂しいような、もつたいないような、自分はその生活感とは違つ所にいるし、戻ることも出来ないんだなと感じた。

N 明るく話す話し手のお二人からは、寂しさを強く感じた。同時に、実際の付き合い方が変わつてしまつても、近所を想う気持ちは変わらない方々もいるのだと思つた。

部屋の広さ

〔2014年8月19日〕—夫、妻、志村、中山、好井〕

会社の社宅は、役職によつて条件の良い所に引っ越すをする仕組み。現在も社宅で暮らす夫婦に、今までの引っ越し経験などをお伺いする。

Y 社宅の広さっていうのはどのくらいなんですか?



露路 砂畠社宅(伊東信撮影)

S | この写真を見たある方が思い出したのは、飼い犬にはスピッツが人気だったこと。(写真に写るのはスピッツ系の雑種かもしれないけれど)閉山直後には、足尾から引っ越した人がやむなく飼い犬を手放すケースが続出し、町には捨てられたスピッツが多かったという証言も。

夫一広さはね、会社の役職によって変わりますね。古河さんは。

Y一社宅の中でもそういう違いがあるんですか?

夫一あるんですよ。最初は6畳、3畳で、6、3畳の部屋の他に

お勝手が2畳ぐらいあつたんですよ。

夫一お勝手は2畳です。それが鉱員の最初の社宅なんです。それで、その2畳の所にお勝手があるんですけども、水道は引いていなくて、共同トイレで共同浴場なんですよ。だから渡良瀬社宅に今でも残っている共同水場と共同浴場があるから、見て行つた方が良いですよ。ここにしかもうないですから「3」。もうここしか残つていなくて、あとは全部壊しちやつたから。社宅は今言つたような6畳3畳の広さの所もあるし、6畳6畳になつたりもします。職場での立場が上方に行くにつれて、変わつて行くんですね。鉱員さんから、その次が現場の係員、まあ主任くらいで、その上の会社でいう、総合職の一一番、総合職までいかない下の係長くらいになると、その上になつて、副課長になるとまたぐつと上に行つて。で、会社のある程度になつてくると、玄関があつてお

風呂場があつてっていうことなんですよ。だから、私らも最初に入つた時は、家内とそここの6畳3畳の社宅に入つたんですよ。それで、何年か勤めてから、内便所でお勝手も家の中にある社宅に入ることが出来ました。

妻一2回目の引っ越し先には水道が入つてましたが、昭和50年頃には社宅もほとんど水道が家の中に引かれていましたね。

夫一それで、部屋の大きさが6畳6畳くらいか。

Y一そこはもう水道が入つているんですか? 家に?

夫一その時は入つていましたね。それでその後はもう内便所のある所で、6畳6畳、4畳半か。それで廊下があつて、まあまあだつたんですよ。それでそこにしばらくして、今の社宅に越したんです。それから今の所にずっと住んでいます。そこはね、8畳6畳、4畳半の、玄関があつてお勝手があつて、お風呂があつて、それに廊下。廊下が結構広いんですよ。4尺廊下だから結構広いんですよ。

妻一で、庭があつて。結構庭が良いので満足しています。

Y一あの、掛水俱楽部で公開していますよね。所長の「4」、

夫一役宅ですね。役宅にも一般管理職から所長宅までですが、あそこは所長、副所長宅、参事宅です。

Y一その落差にすごくびっくりしたんですけども。

夫一そうでしょ、だから課長宅なんかは、重役役宅の前の方にあり、一般社宅と違う所は風呂がついているくらいかな? ただ、屋根が瓦だつたりするから向こうの方が立派かなと思うんだけれども。

ども。ほんと掛水の方は本社採用の社員のキャリア組の入る所なんです。役宅のうち、掛水俱楽部でいくつかを公開していますけれど、女中部屋とかあってすごいんですよ。あれは古河独特ですよ。

妻 一所長とか、あと会社の付属病院がありましたからそこの院

長。副院長、そして先生たちが入つたので結構広いんですよね。

Y いやあ、だからね今の部屋の数とか、仕事のね配置で家が変わってくるとともにそうなんですが、基本的にそれって男性の理屈じゃないですか。で今の話を聞くと、家庭会「5」というのもあるということですが、その奥さんたちの中ではそういう差はあつたんだですか？

妻 だいたいないです。ないですけれども、内面では「あそこのお家では、係長だから」「あそこのお家ではヒラだから」っていうのはいろいろありましたよね。

Y そういう話を聞きたい、ハハ。

妻 ハハ、まあ怖い。ハハ、そういうのはありましたけれども、まあ、あまりいざこざとか、今ドラマやなんかでやるようなああいうのはながつたですよね。

夫 一個人差はあるけれども、極端にはないですよ。あそこは課長さんの奥さんだからて多少はあつたけれども、むしろ組合員の奥さんの方が元気よかつたから。

妻 あの、結構活動しましたよね。私たちはね。それで主婦の会っていうのがありますして、労働組合に旦那さんが入つている人が主婦の会の会員になるんです。結構いろんなメーデーとかありますし、閉山の時とかは本社まで交渉に一緒に行つたり。ハチマキをして行つたりしました。

夫 一社宅などでなんで差をつけているかと言うと、一生懸命やらせようとして差をつけているんですよ。一生懸命やれば、

Y 目に見えていくわけですね。

夫 そうそう。それで、一般鉱員さんからだいたい総合職になるのは、本社採用の総合職と、下からり上がりてくる総合職では全然違うけれども、下からいつたのはせいぜい、いつても副課長くらい。まあ、運よくって課長くらいなんですよ。だから、あの20代の時に一生懸命やつて30くらいで職員にならないと、遅くなっちゃう訳だね。だからみんな一生懸命やつたと思うよ。そういう会社の仕組みだと思うよ。

「お話を聞いて」

S 一社宅は外から見るのと、実際に中に入つてみるのでは随分印象が違う。今回のご夫婦が現在暮らす社宅は、少し高台の場所に立地していて、居間から綺麗な庭も見えてとても住み心地良がさそうだ。また、銅山の職種(地元採用、本社採用、坑内、坑外)の違いは、いろんな人に聞けば聞くほど、細分化していく同じ銅

山の仕事でも全く違うようで、全体の組織がどうなつていいのかも今後気にしていく必要がある。

N—実家のマンションで「どちらが上の階でどちらが下だ」だと

か「あそこのご主人は官僚で、あそこはごいの会社の重役だ」と
いった噂があることを、ふと思い出した。ある意味どこの世界も
そこは同じなのかなと思った。

-
- 1 旧国鉄足尾線のこと。群馬の桐生駅から足尾の間藤駅まで繋がっている鉄道だが、昭和62(1987)年の国鉄民営化の影響で、足尾線も廃止の対象となり、それを阻止するための乗車運動が展開された。2年間の東日本鉄道会社による運行を経て、平成元(1989)年からわたらせ渓谷鐵道として運行している。
 - 2 他の方からも、社宅を鶏小屋と言い表わされていたと聞く。一方で、足尾に住んでいる一部の人はハーモニカ長屋とも呼んでいた。
 - 3 この時現在残っている共同浴場、共同水場を案内してもらう。当時のままで残っているのは渡良瀬だけ。現在も住居として利用されているため一般の見学はできない。
 - 4 排水渠渠部に隣接する役宅。
 - 5 労働組合員の奥さんの集まり。

Q 4

戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？



中国人殉難烈士慰靈塔除幕式 式典のようす | 昭和48(1973)年7月30日(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

聞き取りでは、戦時中の暮らしへについて尋ねることが定着してきた。特に聞き入ってしまうのは、外国人捕虜、朝鮮人労働者、進駐軍と足尾の人たちとの関わりの話。例えば、小滝坑エリアには造りが異なる中国人慰靈塔と朝鮮人供養塔がある^{〔1〕}。が、私たちは中国や朝鮮の方と足尾がどのように関係していたのかも最初は知らなかつた。慰靈塔を見て初めて当時足尾に来ることになった人たちの存在を認識し、聞かせてもらった当時のやり取りから、戦争の影響により足尾に来ることになつた人たちについて想像するようになつた。まだ、日本に来ることになつた方の視点は圧倒的に足りないが、今後聞いていきたい。

イモとコッペパンを交換

〔2014年4月15日――M・志村、中山〕

第2次世界大戦中に学生だった方の当時の記憶。農家だったの
で一般家庭よりも食糧に困らなかつたため、食料を分けるやり

取りがあつたようだ。

坑など何箇所か分かれてね、選鉱でも働いていたんですよ。みんな中国人とか、今の韓国ですか、朝鮮人もああいうのも戦争の流れで働きに来たり、鉱石のああいうのを、

S一分別したり?

M――選鉱なんかをね^{〔4〕}。だからあの頃、砂畠あたりは朝鮮人の人たちの家族がいて食べ物がないから、神子内まで野菜をとりにきましたよ。

S――買いに来たつことですか?

M――そう、お母さんは子供を腰にくくりつけてくる。日本は背負があつたんです^{〔2〕}。あと、かじか荘に行く途中に小滝の里がありますよね、あそこのちょっと行った場所に斜め左の所に沢があ

るのですが、そこにも中国人が収容されていた^{〔3〕}。あとは、本山

M—私の家にも食糧を求めて来ましたよ。日本語が上手な人がいましたけれども。それと、そこらへんに生える草があつてね。それを食べられると知っているから、みんな摘んでね。それでノノヒコって知っていますか? らつきようみたいのがなつている草です。「それ採っちゃ駄目だぞ」と言うんだけれど、みんなむしって盗んで行く。でもね、黙っていたけれども子供だからね、「採るなよ」とって言つたら採らないかなと思つたら採るので、石なんか投げたことがあるね。

S—ああ、そうですか。

N—あの戦争中、戦前も戦後も含めて、やっぱりみんなが食糧難だつたじゃないですか。の中でも、特に外国人の人は日本人よりも食べられなかつた?

M—食べられなかつたですね。日本人は、良い人は特別にいるんですけども、悪い人もいるから。その頃はある、野路又のグラウンドの所に収容所がありまして、珍しいから当時子供だった私は、その囲いがしてある収容所に行つたんですよ。そしたらその柵越しに収容されていた人と話したんですね。その方が「私は、中国人で収容されている者なのだけど、あのイモが食いたい」と言つたんですよ。「サツマイモとか、そういうのを食べたいんだけれども、あなたの所にありますか?」と聞かれたので、家に買い出しで買ったサツマイモが少しあつたから、「ある」と言つたの。で、

うちのお母さんにそのことを話したら、「気の毒だから、持つて行ってあげろ」とて言うから、昔の鞄にサツマイモを入れてき、1貫目[5]くらい収容所に持つて行つて同じように柵の所で会つて、渡したもん。そしたらその人が「ありがとうございます。ありがとうございます」と待つていてください」とて油パン。

N—油パン?

M—油パン、コッペパンっていうのかな、同じ。パンを油で揚げるんですね、それをくれましたよ。

N—へー、なんか温かい話ですね。

M—そんで「お金なんだけれども、これ」とて、竜がついているお金を1枚か2枚くれました。それでパンは12、3個くれましたよ。

N—へー、そんなに。

M—沢山貰つて帰りましたよ。「ああ、ああいう人がいるんだな、ああいう所に入つてきてかわいそうだな」と思つた。あとはその、日本人で親切な人がいたんですよ。砂畠の人で親切で、帰りに自分の食べ物の残つたものをあげたみたいですね。連合軍、オーストラリアの人とかそういう人にもくれたみたいですね。それで、終戦になつた時に、連合軍の飛行機が飛んてきて、タバコとかそういうのを落としたんですね[6]。捕虜の人に落として行つたわけ。それで、捕虜の人たちはそれを貰つたら、「世話をなつた」とて良くなしてれた人にタバコとか何やらを分けたんだよね。

「お話を聞いて」

S — 戦後直ぐにパラシュートで捕虜の人たちに嗜好品が落とされたという話は、他の方からも聞くことができ、戦後の一つの共通する風景だったようだ。また、別の複数の方から、捕虜の方に対する親切にした、酷い扱いをした話も聞くが、それらの場面が話題に出た時に、どう反応していいのか分からずとにかく聞き入ってしまいます。

N — 戦時中や戦後、また外国人捕虜や朝鮮人労働者の話を、実際に経験した方々から、足尾に来たことで、人生で初めて伺うことができた。様々な意見や見解があり、議論が尽きないテーマではあるが、少なくとも語られるそれぞれの事実を知ろうとする努力が今の若者に必要なのじやないかと、若者なりに感じた。

豊かな知恵を教えてもらう

【2014年7月】夫妻・志村・中山

戦時中の暮らしを教えてもらうために、小学生だった当時の食糧事情について尋ねた。朝鮮の方とのやり取りの話になる。

S — やっぱり戦時中もだけれども、戦後も大変な時期が続いたんですね?

夫 — 一合の米にさ、水を10倍、一升入れてさ、ドロドロにして。

S — あー、おかげとも言えない感じの?
夫 — そこに今度はイモ、サツマイモのあれを入れてさ、で塙を入れて、それですって食ったんだから。

S — あー、そうなんですね。へー。

夫 — で、俺の弟なんてみんな栄養失調で死んだんだから。

N — あ、そうですか。

夫 — 母親が死んじやつたろ、ミルクは買えない、母親がいないからおっぱいも飲めないから。うん。で牛乳だつて、ここからだと横根山【7】の牧場まで買いに行つたんだけれどもね。何回か行つたけれどもね。

S — 歩いてですか。

夫 — 歩いてだよ。赤ん坊に飲ませるために。母親が子供を産んで、すぐ死んじやつたからね。「子供には牛乳が良いうて言つていたんだけど、やっぱりね。赤ちゃんには牛乳は良くないんだよね。今はそういう風にわかるんだけど、昔はねそんな風に知識がないがね。牛乳飲ましたらみんな下痢しちやう。腸を悪くしちやうからね。だから結局重湯、米のない時代に重湯の上澄みを砂糖入れて飲まして、だから栄養失調になつちやうがね。今なら、ビタミンが栄養だつて、みんな認識したけれども、昔はビタミンもミネラルもそんなの分からないがね。とにかく腹きつなれば大丈夫だろう、どうにかなるだろうっていう頭だつたから。

……(省略)……

夫 だから、戦後はタンパク質が摂れないがね。肉と豚肉とかそういうのがないから。結局ネズミ獲って、ネズミを料理して食う人もいるし。

S ネズミ?

夫 蛇を捕まえて蛇を料理して食べるとかね。

S そんなことしてやつたんですね。

夫 千葉県とかそういうとこの農家へ行くとき、栃木県もそうだけどさ。農家に行けばカエルとかいろいろいるけどさ。俺そういう農家っていうの知らないから、足尾っていうのはそういう知識がないがね。見ればハゲ山で、スキがスッカンボ^[8]しか生えていないうようなね、痩せた土地だから。結構、ネズミとか蛇はいっぱいるからね。蛇を捕まえたりさ。

S ネズミを食べるっていうのは初めて聞きました。

F ネズミ食べたよ、食べなくちゃ。それもやっぱり食べる知恵を教えてくれたのは朝鮮人なんだよ。

S そうなんですか?

F 結局強制労働で足尾は随分朝鮮人がいたから、うちの隣も朝鮮人の家族だったけれどもみんな教えてくれたから。うん、「生きていくんだったら、タンパク質が必要だよ」って。当時はタンパク質なんてそんな言葉は使わないけれども「食わなくちゃ駄

目だよ」って。うん。早く言えば、生物。「生き物を食べなくちゃなんないべ」って言われた。「生きているもの食べなくちゃ生きていけないんだから」って。

S ちなみに、ネズミって捕まえて皮とかどうしたんですか?

F 結構美味しいんだよ。

S 切つて?

F 骨だつてカラカラに焼いて、美味しいんだよ。

N 俺、結構なんでも食べたことがあるんですけども、ネズミはないです。

F ハハ。

N 俺、犬もウサギも蛇も食べたことあるんですよ、カエルもある。

F カエルは美味しいんだ。だから終戦、昭和21、22年頃っていうと、みんな舟石^[9]行くと結構野生のウサギが一杯いたんだよ。そういうのを仕掛け獲ってきて食べたりしてね、うん。

【お話を聞いて】

S 「朝鮮の人人が教えてくれたんだから」と、改めて感心しながら話してくれていたのが印象的。そして、その時にやり取りした相手の朝鮮の方がどんな人なのか知りたくなった。

N 外国人に対する印象も人によつて違うのだと思う。この方のように近くに住んでいた朝鮮の人から知恵を得た方もいれば、あまり外国人と接したことがなかつた方もいるのだと思う。

ただ、今回のような異なる文化を尊重する態度は学ぶところが多い気がした。

近所の人や進駐軍との交流

【2014年7月7日】夫・妻・志村・中山】

小学生だった頃に丁度戦争になり、鉄道を使って食料の買い出しをしていたという方のお話。子供目線で様々な場面を見ていたことがわかる。

夫 だからこらのり人でもほら、朝鮮人の人が砂畠に住んでいた

ろ。俺は朝鮮人の子供らの友だち所にしようちゅう遊びに行つたから。同級生で。「お前の家に遊びに行くぞ」なんて言つてさ。すると瓶から食べ物を出すんだよ。

S え? 瓶から?

夫 一瓶。瓶からさあ、今でいえばあれだね。

N キムチみたいな?

夫 ああいうところに漬けておくんだね。「うまいの食わせつから」って言うと、今でいうキムチなんだよな。ああいうのを出してくれたり。「お前の家、瓶一杯あるな」ってやっていたんだから。

S あー、なるほどね。瓶ごと引っ越して來たんだ。

夫 うん。こういう小ちやい瓶なんてあつたんだよ。それで、一回

火事があつて大変、だつて友だちの家に飛んで行つたらさ、そうしたら瓶を渡してよこすんだよ。「出してくれ」って。

S え、瓶を?

夫 ハハ。瓶とかね。棚みたいな家財道具じゃないんだよね。そういうのの中に、衣類だつてちやんと箱に入つていてるんだよ。だから出してくれつて。もう壺で持ちやすいものになつていてるんだよね。あの、だからほら、ああいう朝鮮はほら、あつちが攻めて来たり、こつちが攻めて、何が来つか分からんんだつてね。だから、本当に、パートつてやつて持つてやつて。

S あ、すぐに逃げられるように?

夫 逃げられるものを壺にしまつておくんだつて、後で聞いたらね。だから火事の時には壺を渡して「とにかくこれ出してくれ、おつ欠くな」なんて言つて。

S 一瓶をこうやつて、バケツリレーミたいに?

夫 一渡しながら中身の音を聞いて「金じやねえなあ」なんてね。

火事で2、3軒燃えちゃつたんだけれども、お母さん、お婆さんらに「なんか持つて行つてあげられるものないけ?」って聞いて「ほら、これとこれ持つて行つてやれ」なんてさ、やっぱり持つて行つたことあつたよ。「ありがとう」なんてさ。……(省略)……それで、その子が朝鮮に帰る時に家に来てね「お礼に來た」つてさ。だけど中には朝鮮をいじめた人はさ、足尾から先に逃げちやうんだよ



S | 白人捕虜収容所跡地周辺の現在の様子。“[米国国立公文書所蔵資料]に記録されている野路又の捕虜収容所の資料には、「1943年11月10日、東京捕虜収容所第8分所として、栃木県上都賀郡足尾町野路又に開設。1945年8月、第9分所と改称。9月閉鎖。使役企業は古河鉱業足尾鉱業所。捕虜はトラックで製錬所に通って作業に従事した。終戦時収容人数245人(米210,英32,他3)、収容中の死者24人。」と記されています。”(大吉利一郎、「足尾町野路又にロマンを求めて」、粟野印刷、2013年、78頁)

ね、ほらいじめられたから、「あの野郎」なんつてね。でもわざわざ、「もうそろそろ、朝鮮に帰るから」なんて言つて「あれしてください」といふんだよ。牛までぶつ殺しちゃうんだから。バケツ山盛りになんて来てくれた。だから懐かしかつたよね。

S — その帰つたつていうのは、終戦後すぐつてことですか？ それとも、月日が経つてから？

夫 — 終戦すぐだね、もう暴動みたいなのが起きて、あれしちやつてしようがないんで、あれが来たんだよね、アメリカ人。アメリカ軍が。小学校に泊まつて鎮圧していくんだよね。外国人捕虜などの人たちが暴れ回つたんだよね¹⁰。だからもう逃げたり、それでそのうち、ほら、朝鮮系とあれとで押さえたり何なりして。だからほら、当時外国人を使つていた人たちみんな逃げちやつたんだよ。ほら、坑内あたりで、「この野郎、ふざけんな」なんて言つて使ついた奴は逃げちやつた人がいるんだよ、いっぽい。いじめた奴は、

S — 何されるか分からぬから。

夫 — だけどやつぱり仲良くタバコなんて目の前でパバつてふかしてさ、ベット置いて「じゃあな」なんて言つて。そうやつて吸わしてやつた、そういつた奴なんかは今度は帰る時に逆にお礼に来てているんだよね。「お世話になつた、班長さん」って。班長さんって言つんだよね。「班長さんいろいろお世話になつた、班長さん優しかつたから」つて来てね。家の親父の所とかに来てさ、だから終戦になつた

て、その暴動が起きてちょっと収まつてもう帰るつて頃になつた。ね。もう、びっくりしたんだけれど、豚でもなんでもぶつ殺しちゃうんだよね。牛までぶつ殺しちゃうんだから。バケツ山盛りに肉持つてきたよ」なんて持つてくるんだから。ハハ。

S — ハー、凄いですよね、ごちそうですよね。

夫 — 「班長さん」なんて言つてさ、「肉持つてきたから」なんてさ。

「犬じやなかんべな」って言うと「豚殺したから」なんて言つて。ああいう、みんな長屋で豚でもなんでも殺しちやつて食つちやうんだもんね。だからそういうの言われて、「見に行くんべ」って見て見に行つたこともあるもん。ハハ。見てみると上手いんだよね。豚なんか、バーツとネットかけて、こんな変な道具でバリバリバリバリ毛とつちやつてね。

N — 動物を飼つていたんですか？

S — 屠場があつたのかな？

夫 — いや、買い出しかなんかに行つて、ああいう所から買つてきた

り。あれしたんじやないかな。そんな屠殺場でもないんだよな。
……（省略）……

S — それと、終戦直後に外国人捕虜収容所に嗜好品が詰まつたパラシュートが降ろされたと聞いたんですけども、ご記憶ありますか？

夫 — ほら、飛行機がどんどんどんどん来たから。で、落下傘で。

妻 —みんな落つことす。

S —タバコとかそういうの?

夫 —落下傘で。

妻 —私もね、家の近くに落つことしたんだ、取りに行つたことがあるの。ちいちやい時に。そうすると知らないから開けちゃうのね、中にチョコレートがあつた。

夫 —そういうパラシュートで荷物が砂畠とかにね、パ一つて落とすだろ。それで目的地に落ちればいいけれども、こうちの方に落っこちちゃつたりするんだよ。そうすると収容所の管理の人が「駄目だ」って言われつけど、後になつて「探してくれつか?」って言つて探してくんのさ。

S —どのくらいの大きさなんですか?

妻 —そんなん、あんまり大きくなかったよ。

夫 —落つことす時はこんなでかい箱で落つことすんだよ。

妻 —私が覚えているのは小さいの。

S —で、パカつて開けると中にチョコがいっぱい?

妻 —チョコ、チョコがいっぱい。

夫 —だからでかい飛行機で来るんだよ、大つきい。で、ワ一つと来てボつと落ちこちるんだよね。そうすると、目的地に落つこちないで風で流れちゃつたりすると、山の中に落つこちゅうんだよ、ダーンつて。そうすると凄いんだよ取りに行くのが。「お前ら行つ

てくれ、取りに行つてこい、手伝つてくれ」って言われて探しに行つた。で貰つてきたことある。だから落下傘の生地やなんかも「このんなのいないから、みんな持つて行け」ってみんな生地を切つてくれるのさ。凄い生地なんだよな。だから「リュックサックにするとい良い」って言つてみんな、同じ様な色のリュックサックを背負つてな、ハハ。笑つたんだよ。

S —へー、そんなこともあつたんですね、面白い。

夫 —布をくれたんだよ、お礼に。「持つて行くか」って聞いて切つてくれて。だから進駐軍が来た時はもうそこであれしていたから、おいらの所こうやって呼んでさ、その時初めてソフトボールとかさ、「一緒にやるべつて言つてさ。

S —え、進駐軍ですか?

夫 —うん、あの時「ああ、ソフトボールつていうのは、こういうのなんだな」ってさ、ほら野球じゃないんだって。こんなにでっかいボール持つてきて、進駐軍が「野球知つているか、やつたことある?」って言つて。「ソフトボール!」って英語で言つて、一緒にやつたことある。

そしてお礼にチョコとかをてくれた。で「貰つて良いのか、先生?」って先生に聞いたら「貰つて良い」って言うんで。で、学校に年中遊びに行くとさ、ソフトボールとかやらせんの。ボクシングとかさ、あれ2、3回やるとへたばつてさ。ハハ。だから進駐軍が来た時にみんな面白いことやつたり、一緒に色んなことやつたりして和や

かだったの。でも先生はなんか「あんまり貴わないでくれ」とかなんとか言つたけれども、「仲良くするんならいいよな、しようがないよな」って言つたの。だから遊びにいつたよ、年中。進駐軍のあそい学校へね。

【お話を聞いて】

S 「少し違う家の中の壺に気づいたり、パラシユートを探しに行く楽しさなど、子供目線だからこそその感覚。背の高い毛むくじや

らの進駐軍に驚いたとも言つていた。ネガティブな要素だけではなくて、純粹な変化に応じて新しい人や文化に入り込んでいく明るさも凄いと改めて思った。

N 「戦後の進駐軍と日本人との関係についての話は特に興味深かつた。欧米人に初めて接する子供は、大人よりも無邪気に交流することが出来たのだと思う。異文化とふれあうこととなつた当時の興奮が話し手の語りから伝わってきた。

1 小滝坑エリアには中国人捕虜収容所・興亞寮跡と、朝鮮人供養塔専念寺小滝説教所跡がある。

2 野路又の白人捕虜収容所には245人、砂畠の白人捕虜収容所には213人が収容されていた。参考：米国国立公文書館所蔵資料。

3 興亞寮と呼ばれた中国人捕虜収容所には257人の人が収容され小滝坑内外で働いていた。

4 昭和二〇年九月当時の足尾の従業員は、職員四六八、鉱員四六八七、臨時鉱員一四四、計六五六六名で、全部日本人でしめられたが、昭和二五年から朝鮮人労働者がおもに坑内の運搬夫として使われ、一七年からは、労働報國隊や学徒労働員の人たちが選鉱製煉を中心の工場に入ってきた。『村上安正編「足尾銅山労働運動史』（足尾銅山労働組合、1958年、178頁）

5 3.75キログラム

6 足尾の複数の方から聞く話。資料でも「砂畠と野路又の白人捕虜収容所の屋根には、白ベンキで「P・Wマークが描かれせまい山あいを縛てアメリカの飛行機が急降下し医療品や食糧などを落とすで投下して、つい先づるまで」足尾は山の中にあるから、爆撃したくても山にぶつかってしまうので、絶対空襲はうけない」と安心していた足尾町民の度きもを抜いた』（村上、前掲書『足尾銅山労働史』、189頁）などの記述がある。

7 足尾と鹿沼の間にある高原地で、開拓農家などがあった。

8 イタドリのこと。

9 備前橋山の中腹の本山と銀山平の中間地に位置するエリア。

10 戦後の暴動に関しては、各証言や先行研究で様々な説明がある。足尾の方から聞く話では、戦時中酷い扱いを受けていた労働者が、終戦直後に意地悪をした人を探しまわったという内容。資料では、帰國の促進を求めるデモ行進や補償要求の交渉などが行われ、それらを暴動とされることがあった。参考：村上、前掲書『足尾銅山労働史』、村上、前掲書『足尾銅山・朝鮮人強制連行と戦後処理』（駒澤大学経済学会『経済学論集』第26巻第4号、平成7年3月）。

Q
5

—キラキラした石、見つけたのですが……



協力隊が足尾で拾った鉱石のかけら。

足尾に来たばかりの頃、鉱物の置物が観光施設や商店などに飾られていて、それなりに銅山らしさを感じていた。しかし、予想を上回ったのが各家庭に置かれる鉱物の有様。「友だちに貰った」「昔集めたのを持つている」「何処の家にもあるがね」など、いろいろな方法で手に入つたらしく、どこの家庭にもと言つていいほど何らかの鉱物は見かけるし、庭先に放置されている(転がつている)ことも……。よそ者にとつては感激してしまふのに、「そういえば、家にあるよ」と棚に埃まみれになつて忘れ去られていた水晶の塊を見せられると、今でも山道などで拾えるピカピカした石(水晶などが混ざつた鉱物の破片)を見つけて喜ぶ自分が恥ずかしいような、大人げない気持ちになる。

鉱石のようなお菓子

「2013年7月11日—兄、弟、志村、中山」

昭和30年代に小滝で幼少期を過ごしたこちらのご兄弟は、トロッコ遊びや、町の様子など楽しい話題で盛り上がる。鉱物の方も、「そういえば……」ということで一瞬思い出してもらった。

S—あー、そ、うなんだ。

兄—黄銅鉱とか磁鉄鉱とか、もっとキラキラしているものとか。

今言つたように、水晶とか六方石とか。引っ越しの時に全部捨てちゃつたけれども。握りこぶしくらいの塊とか、大っきいのだとリュックサックくらいの塊とか。六方石とかを、床の間の飾りもんにしていました。

N—いいなあ。

S—足尾の人のお話を伺うと、綺麗な鉱物を家の中に飾つてい
たという話を聞くのですが、そういうご記憶はありますか?例
えばこういうの拾つたんですけど。【1】

兄—もの凄く、いっぱいありましたよね。こんなのどこにでもあり
ました。

弟—確かに床の間にでっかいの、あつたような気がするんですよ。
確かに床の間にいっぱいあつた記憶があります。水晶だな、きっと
ね。ボボボボって白い刺がさ。小さいながらも立派だなと思つた
けれども、どこに行つちゃつたんだろうね。ハ。

兄 「こんなもん」なんて感じで。鉄鉱石とかね、金色の、石の部

分が無いんだから。100パーセント鉱石。

弟 「綺麗だな」と思つけれども、それほど値打ちがあるとは思わないから。

S 「それが普通だつたんですよね。

弟 「多分持ち出し禁止だつたんだろうな、今思えばな。それ親父なんか持つてきて、どここの家にもあつたからな。ハハ。こんなでかいの、家の中に入らないだろうけれども、

兄 「だから駄目だと言ひながら、堂々と持つてきていたんだろうな。本当にどこの家にもありましたよ。

弟 「あとは、足尾のお菓子屋さんでもそういうお菓子を作つていだもんね? 鉄鉱石の形をした砂糖の塊(54頁参考)。本当にお菓子だか石だか分からぬくらいの。六方石みたのとか、

兄 「緑色のとか。
弟 「確かに、あのお菓子もどこで売つていたんだろうな。

兄 「間違いなくあつた。

S 「それは飴ですか?

兄 「板菓子、砂糖の固まつた、板になつていて。

弟 「でもたぶん甘いだけなのかな? ハハ。

S 「よく食べてたんですか?

兄 「たまにお土産とかで貰つて食べてましたよ。丁度なんだろ

う、氷砂糖のようなものですね。

弟 「そうだ、氷砂糖だ。硬かつたものね。

N 「他に足尾で作つていた製品というか、今は無くなっちゃつただけどな、つていうお菓子とか何かありますか?

兄 「足尾は何もないんだよね、

弟 「何もないんだよね、そう言うと寂しくなっちゃうけれども。

「お話を聞いて」

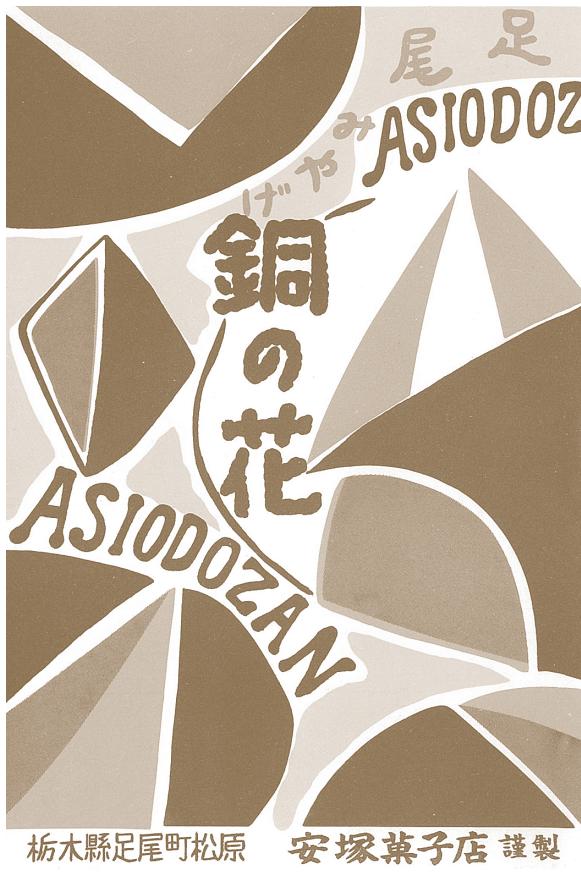
S 「全体の話の中では鉱物の話題は一瞬だけだつたけれども、確かに記憶にある(そういうね、という感じで)。私の見つけた鉱石のクズは、本当に「こんなもん」で、とても敵わない。ちなみに、鉱物のお菓子は残つていないが、現在の足尾ではあんこ玉や足字錢中最中がある。

N 「鉱石を引っ越しの時に捨ててしまつたということに驚いた。よそ者からすると「もうたいない!」と思つてしまつが、足尾では人によつては「ありふれている」もので、そこまで固執しなかつたのかなと思う。

喫飯所で鉱石を洗う

〔2014年3月5日〕夫妻・志村・中山

社宅暮らしの話題の合間に、すかさず鉱物について聞いてみると、別の部屋から鉱物を持って来てくれた。



鉱石菓子 銅の花 包装紙(提供:安塚菓子店)

S | 当時のお菓子の説明文には、“銅の花は足尾銅山から産出する鉱石を表現した砂糖菓子で真に鉱石を思わせる足尾の代表的な御土産产品であります。銅山の主要鉱石の黄銅鉱とそれに伴って産する石英(六方石、水晶)方解石などを配して形どった作品であります。原料には砂糖菓子と白ざらめを使って加工したものであります。……お召し上がるときは、よく破碎していただき足尾の話でもしていただければ幸いに存じます”と記されている。お店の方の記憶では、昭和30年代から閉山時には確実に販売されていたが、いつしか作らなくなってしまったとのこと。

夫 一何の鉱石だつてさ、もう良い鉱石なんてみんな持つて行つたんだよ。鉱物を家に飾っていた人が一杯いたんだよ。そして、飲み代にみんな売つちやつたとか、家にも親父が持つてきてかい、こんなウワーッてのがあつたんだから。だけど、「飲み代にしちゃうべ」なんて言って、ハハ。「また拾うから」なんて言って。だから一番持つて行つたのは、他から出稼ぎに来ていた……、

N 一組ですよね。

夫 一〇組が来たもんだろ、その親方さんがそういう鉱物が好きだから買つたんだよね。

N 一買つた?

夫 一閉山の前にもうほら、「あそこに酒代に持つてけよ」なんて、初めはおじさん、「いやー、俺が買うから」なんて言つたぞ。

S 一その鉱物をですか?

夫 一閉山の前にもうほら、「あそこに酒代に持つてけよ」なんて、初めはおじさん、「いやー、俺が買うから」なんて言つたぞ。

N 一〇組さんはもういないですね、

夫 一いないない。飲み代に持つて行つたんだよね。

…… (省略) ……

S 一へー、でもそこで集まつた鉱物が、どつかにあるんですかね。お仕事していた時に、綺麗な鉱物とか見つけたりしたんですけど?

夫 一うちらの仕事は坑内じゃないから。だから手のひらくらいのなら、持つて来て箱に入れて飾つておいて置いておいたよ。

S 一あー、そんな話羨ましい。良いな。足尾に来てから、鉱物があることにびっくりしたんです。夫 一うん、だから、棚のどこかに入つているかもしない。だから、ああいう所に、「つくくらいボツン」と置いてあるんだよね。(本当に、居間の戸棚に入つて)
S 一あ、本当だ。

夫 一昔、貰つてきて。

S 一本当だ、黄銅鉱と、なんか銀色のもまじっていますね。

夫 一そんなの、もう本当に普通でね。みんな喫飯所では凄いのを持つて来て、水場でキヤッキヤッキヤッキヤつて磨いてさ。水場に置いておくとさ、鉱石が無くなっちゃうんだよ。ハハ。

S 一へー、誰か持つてちやうんですか?

夫 一「お前、また誰か持つてちやうたな」なんて言うとさ、「いいや、また良いの見つけてくらあ」なんて。初めはもう閉山が決まつたら、みんな「記念に持つて行くんだ」って、そういう。初めはそんな鉱物に振り向きもしないで。

…… (省略) ……

S 一それで、一つ質問があつて。その、坑内からおつきな石を運んできたら、バレないかなと思つたんですけども、

夫 — バレちゃうがね。だから面白いんだね。ほら、組夫でもなん

でもさ、「持つて行けないから、ここに置いてくよ」って言つて喫飯所に行くでしょ。「持つて行けないから、○さんここに置いてくな」って。ここに置くんんだよ、夜番だと帰っちゃうがね。「明日、置いてつてくれらな」って言うと無くなっちゃうのさ。そうすると

「○、誰が持つていたんだろうな」なんて言つて、「あの野郎、きっとあ

の人しかいねえ」なんて言つて、そこに置いてあるの。そうすると、「貴様この野郎」つて、なるんだよね。

S — ハハ、そういうことになるんだ。

夫 — うん、「貴様、この野郎」つて指差されるんだよね。「坑内にあるうちには古河のモノなんだけれども、外に行くと俺のモノだわ」なんて言つてね。「この野郎」なんて喧嘩になつて。

S — そうなんですね。喫飯所では、どんな風に鉱物が置かれていたんですけど?

夫 — 支柱さんだとか、車夫さんだとかが休む場所があるんだよね。仕事して、ご飯食べたり。そうすると「おう」って言つて入つて行くわけさ、「飯だ」なんて言つて、すると水場があつてそこに飾つてあるのさ。

S — 飾つてあるんだ。へー。見てみたかったな、そういうの。

妻 — ハハ。
— どういう風になつていたんだろう、喫飯所の中に置かれていたんだよ。

るというのは。

夫 — 「いいな」ってなるがね。「いいんじゃないかな」なんて言つて水で洗つて飾つておくんだわな。だから、手のひらくらいの鉱物はもう本当に。

S — いっぱい?

夫 — めずらしくないから、持つて行かないんだよな。

S — あ、当たり前だから?

夫 — 当たり前だから、「うん、まあまあだな」なんて置いて行くがね。「おう、これ貰うぞ」なんて言つと、「ああ、持つてけ」ってそういうんで。だから、手のひらくらいの石、あそこで横になつて埃だらけになつてているけれども、詰めて、木箱作つて置いておいてね。

妻 — でも閉山後、みかん箱つて、リンゴ箱とかの木箱つてあるでしょ、木の。それに鉱石が一杯あったの。

S — あ、その、いろんな綺麗な鉱物ですか?

妻 — うん、閉山までは、家にリンゴ箱2つくらい鉱物があつたの。そしてね、どつかから学生が来るの。研究だとか、何とか言つて。みんなやつちゃうの。

夫 — ほら、もう引っ越すんでさ、そんな重いもの持つて歩けないから。

妻 — で、「この家に行けば、あるかもしねない」って、誰かが教えんだよ。

S — あ、いろんな人から聞いて？

夫 — 「鉱石とかなんとか見たいんですけども」なんて言うが、そうすると「ああ、向こうに行つてみろ」なんて言つて。「〇さんの家つて聞いて来たんだよ」とつて。そのうち、鉱物を見て「これはあれだね」なんて言いながら見ていくんだ。で、「一つ貰えますか？」つて聞くから「ああ良いよ」とつて。

S — へー。えつ、でもそういう人たちがいたんですね。

妻 — いた、学生さん。

夫 — 大学生、中にはね良い石があったみたいなんだよね。小ちゃな石でもね「これください。なんとか石つて貴重なんですね」とつて、S — じやあ、石の研究している学生が来たんですか？

夫 — 隨分来たな。

S — へー、そういう想像がつくというか。なるほど、そういうこともあるのか。

妻 — で、みんなやつちやうんだよ。

N — 高く売りつけてやれば良かつたのに。

一同 — ハハハ。

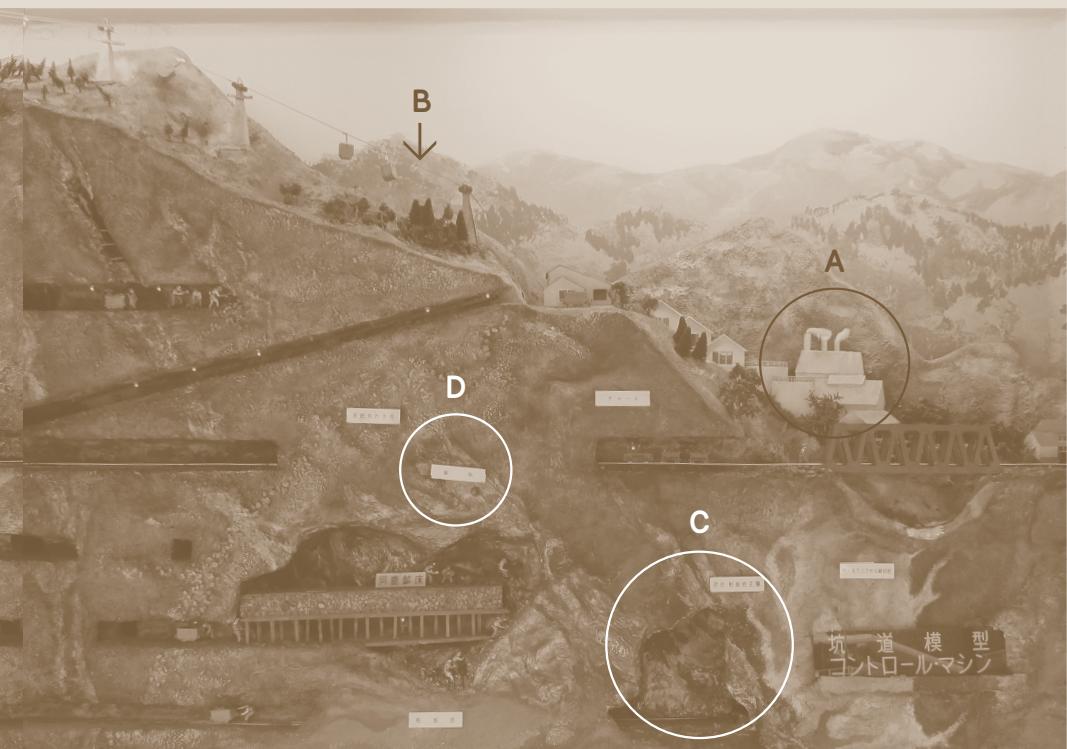
夫 — そこの机の横に埃を被つてある石はね、ただ遊びで集めたりなんかしたから。だから坑内のは良いのが採れたんじゃないかな。坑内に入つていたから。うちらはほとんど遊びに行つて、「おう」「あ、これ貰うぞ」とつて貰つて。だんだん増えると「じゃあ箱作つて入れるかな」とつこうやつておく。良いのがあると兄貴に送つてやつたり。

「お話を聞いて」

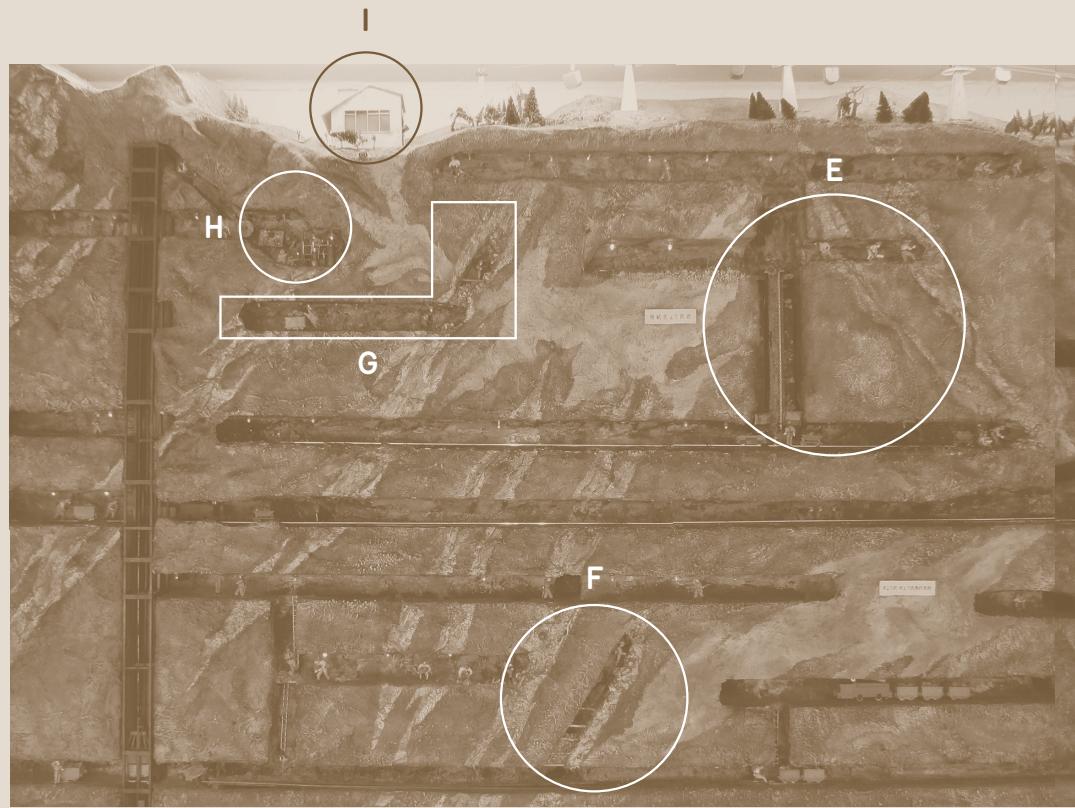
S — 閉山後の石の買い占め、誰かが貰つて行つたという部分。鉱物に限らないことだが、気にしない現地の人の感覚と、他所から目線の珍しさが合わさり、持ち去られたことがよくわかる。私も否定する気持ちはないけれども、なんか腑に落ちない気もする。今更しようがないけれど。

N — キラキラ光る鉱石は、坑内で働く坑夫たちにとつての楽しみでもあつたし、もしかすると励みにもなつたのかなと想像した。記念に飾つたり、飲み代にしたり。きっと光る鉱石を見つけたときはとても興奮し、嬉しくなったのだと思う。

1 備前橋山の山道などでは、赤茶色がかつていて、水晶の破片が混ざっているような鉱石の破片が落ちていることがある。51頁の写真のような鉱石を割ると、黄銅鉱物や水晶が入つていることもある。



坑内のしくみ



足尾銅山観光内・坑道模型コントロール・マシンより

- A 製鍊所
- B 鉄索
- C ダイナマイト爆破
- D 鉱脈
- E 削岩機・トロッコ／スクレッパ運転
- F 下抗口削岩機トロッコ運転
- G 上抗口削岩機トロッコ運転
- H エレベーター機械室
- I リフト機械室

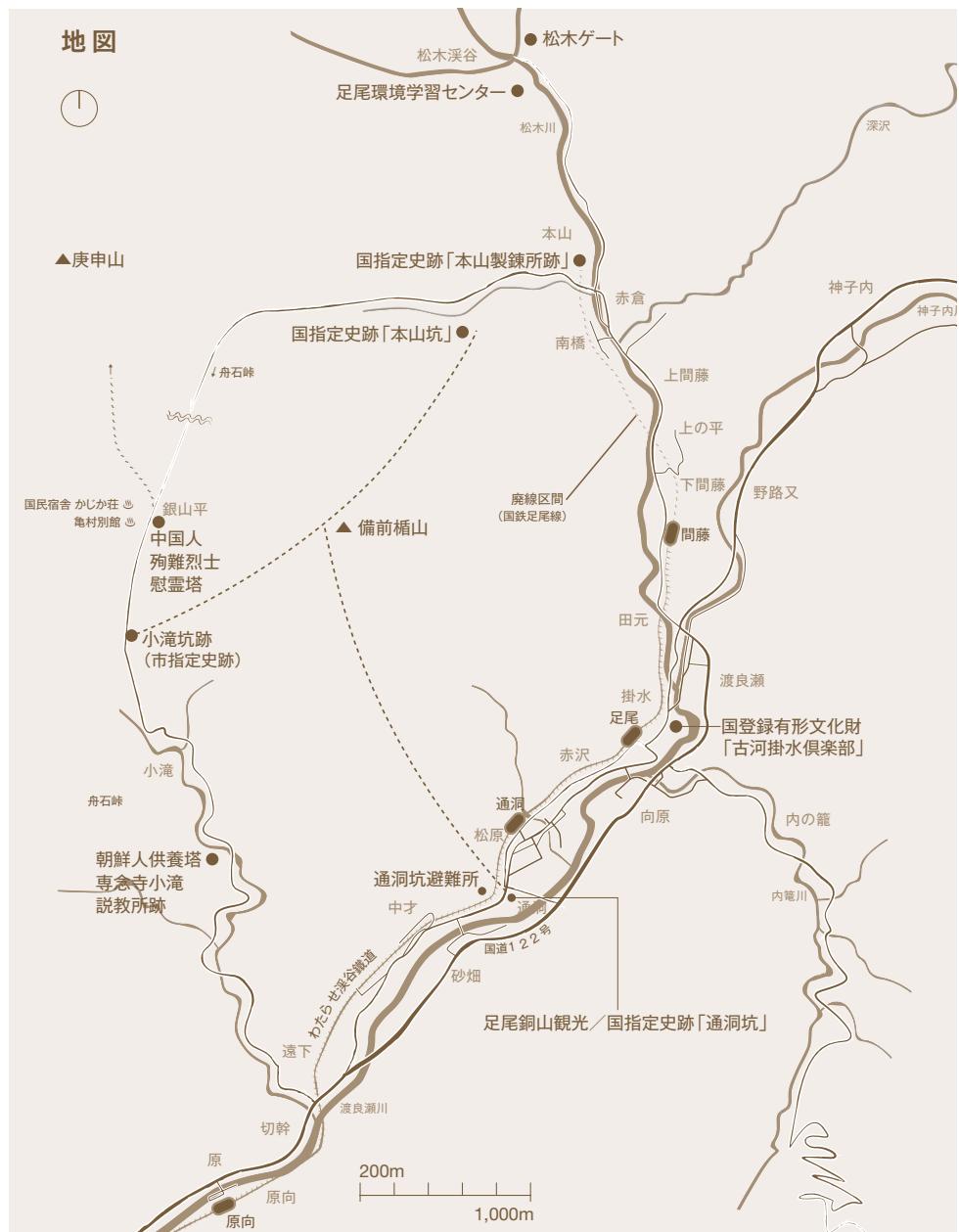
おわりに

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。

冊子の中には、既に知られていることもあれば、ちょっと聞いたことのない場面、信じられない内容もあつたかもしれません。もし、足尾に少しでも興味を持たれたなら、是非とも実際に足尾に足を運んで現地の姿に触れて頂けたら嬉しいです。

聞き取りを続けて気づくのは、「足尾の人は本当に足尾が好きだ」ということです。聞き取りでは、「自分が話すことなんて何も無い」「ちゃんとした資料みたいな話じゃない」と言いながらもどんどん話が広がります。また、日常の中でも足尾の場所や歴史の話題になると、周りの人人が自分の経験談や知っていることを話しかけてくれます。そして、それぞれの話が濃くて果てがないので、立ち話を辞めるタイミングがなく、あつという間に時間が過ぎます。自分の暮らす場所について、こんなに話せるものかな…、といつも驚きつつ不思議に感じます。郷土愛だけではない何か、自分の住んでいる場所をもっと知りたい気持ちや、豊かな思い出を伝えたいという想いもあるのかかもしれません。そんな話し手の方の人間味もひつくるめて、聞き取りを進めていきたいです。

地図



足尾ほぼ全域MAP『日光市足尾地域 移住促進リーフレット 足尾に、住んでいる。』(2013年、日光市)を転用

年表（足尾の聞き取りや日常生活で、必要なキーワードや出来事。）

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉛毒問題を質問	11,664
明治29	1896	第1回(鉛毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治34	1901	田中正造が鉛毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和15	1940	この頃から朝鮮人労働者が銅山の労働に従事	23,187
昭和19	1944	中国人が強制連行され坑内労働に従事	
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製鍊技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製鍊法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	
昭和63	1988	製鍊所が事実上の操業停止	4,935
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196
平成27	2015	(現在)	2,287

[典拠]

『足尾町閉町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産 MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)より引用。人口データは、『足尾町閉町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にっこうを参考にしている。

用語集

古河

足尾銅山の事業主である古河鉱業株式会社（現在の古河機械金属株式会社）のことを指す。足尾の人気が話の中で使う古河には、大きく足尾銅山の事業主である古河の会社全体を指しているといえる。会社のマークは「山一筋」の意味のヤマイチ。

古河市兵衛

古河財閥の創設者。天保3(1832)年－明治36(1903)年。明治10(1877)年に足尾銅山を譲り受け、銅山経営を開始。座右の銘「運・鈍・根」にあるように数年で大直利（銅脈）を当て一気に足尾銅山を繁栄させ、鉱山王と呼ばれた。

田中正造

足尾鉱毒事件に身を捧げる。天保12(1841)年－大正2(1913)年。明治13(1880)年栃木県議会議員、明治23(1890)年に衆議院議員に当選、この年の8月に渡良瀬川大洪水がおこり、大問題になる。翌明治24(1891)年「足尾銅山の儀につき」を帝国議会ではじめて質問。明治34(1901)年12月天皇直訴、義人の名を高める。

足尾の公害

「日本の公害の原点」といわれる足尾銅山における公害は、山本（足尾やその周辺）での煙害と、渡良瀬川やその下流域での水質汚濁、土壤汚染である。自然的要因に加え、用材・坑木・薪炭材需要による森林の大量伐採(6800ha)、明治20年松木大火(1100ha)、亜硫酸ガスなど有害物質の大気中放出などにより山林が荒

廃。この煙害は、昭和31年(1956)年自溶製鍊法が導入され、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。水害は、明治14(1881)年からの急激な産銅量の増加に合わせ、明治18(1885)年鮎大量死など漁業への被害から農作物へと、被害が徐々に現れるようになり、深刻な被害が発生したのが、明治23(1890)年の渡良瀬川大洪水の時だった。渡良瀬川、下流地域での水質汚濁と土壤汚染は深刻な影響を及ぼし、大きな社会問題へと発展した。

三養会

足尾銅山生活協同組合三養会。生協の発祥と言われている。明治41(1908)年に本格活動を開始し各社宅地域に売店があり、足尾町民の生活を支えた。現在は通洞売店と渡良瀬売店の2箇所が営業。

足尾の主要な3つの坑口

足尾では備前櫛山から銅を採掘していた。作業場まで入る主要な坑口は「小滝坑」、「本山坑」、「通洞坑」の3つ。各坑口周辺には銅山施設や住居施設があった。現在では通洞坑の一部が、足尾銅山観光として見学できる。

参考：ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会(文)、足尾町文化財調査委員会(監修)、『足尾銅山百選—産業遺産保存活用の手引き』、2004年

「ごめんください、足尾のこと教えてください！」——地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

「写真について」

発行日・2015年3月30日

発行・日光市役所足尾総合支所総務課

編集・日光市足尾地域おこし協力隊

デザイン・木村稔将

協力・聞き取りに協力してくださった皆さま、古河機械金属株式会社、

新井雅之、栃木県立文書館、安塚葉子店、皆川俊平、好井裕明

写真・伊東信、新井常雄、地域おこし協力隊

・聞き取り調査の資料を閲覧希望の方は、日光市役所足尾総合支所総務課までお問い合わせください。

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2
TEL..0288-93-3115

©禁無断転載

この冊子に掲載している主な写真は、現在も足尾で暮らす伊東信さん(95歳)が撮影したものです。伊東さんは、昭和18年に鍛工として古河鉱業に入社した時に、当時高価だったカメラを中古で購入し、戦後足尾に戻ってから撮影活動を本格的に開始。仕事をしながら、休日に写真仲間と松木などの足尾のあちこちを回ったり、社宅や家族の日常を写しながら、足尾町の芸術祭やコンクールなどで発表してきました。写真の裏には撮影日や、タイトルなどがメモされているおかげで、当時を知る貴重な手がかりとなっています。(掲載写真のキャプションはメモより抜粋)
最近は、お気に入りの柳の絵を描いたり、日記をつけるのが日課です。